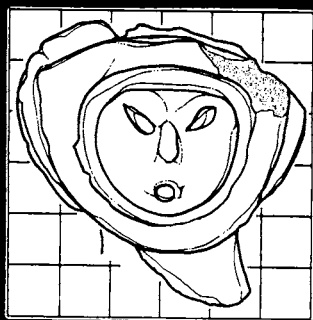


A0036

新潟県巻町

大 沢 遺 跡

—縄文時代中期前葉を主とする集落跡の調査概要—



1990

巻町教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県西蒲原郡巻町大字稲島に所在する大沢遺跡の発掘調査概報である。
- 2 調査は角田山ろく地区一般農道整備事業、第2区第32号耕作道路舗装工事に伴う事前調査として、巻農地事務所の依頼をうけて巻町教育委員会が実施したものである。
- 3 現地調査ならびに室内整理作業は下記の期間に実施した。
発掘調査：1989年7月10日～8月26日、室内整理：1989年8月29日～現在継続中
- 4 発掘調査の体制は次のとおり。
調査主体者：遠藤六郎（巻町教育委員会教育長）
調査担当者：前山精明（同 社会教育課主事）
調査員：若月正光（新潟県考古学会々員）
調査作業員：佐藤セツ（巻町伏部）、鈴木千枝子、藤田京子、藤田フヨ、本間一二、
本間キン、本間フサ、本間真由美、本間洋子、本間芳子、本間良子、
渡辺トミ（巻町稲島）
事務局：富山靖之（巻町教育委員会社会教育課々長）
沢野慎一（同課係長）、田中久美（同課主査）
- 5 遺物整理、図版作成、本書執筆は前山精明が担当した。
- 6 現地調査ならびに本書作成にあたり次の諸氏より協力をえた。
山川史子、廣野耕造（新潟大学大学院生）、菅沼亘、石川里枝、土橋由理子、二ツ井明子
（新潟大学学生）
- 7 本書IV-3、大沢遺跡B・B'地区の石鏃出現率は『巻町史考古資料編』（1991年刊行予定）による。また、同地区石核・剥片類の黒曜石利用率は、新潟大学考古学研究室小野昭助教授のご厚意により紹介させていただくものである。
- 8 本書IV-4、炭化種子は斎藤道春氏（新潟県立自然科学館）、Vは藤田英忠氏（敬和学園高校）の分析結果に基づいている。花粉分析については『巻町史研究』VI（1990）掲載の藤田氏報告を参照されたい。
- 9 剥片石器類の石質鑑定は小林巖雄氏（新潟大学理学部）による。
- 10 出土品は巻町教育委員会が一括保管している。
- 11 発掘調査から本書作成にいたる間に、次の諸氏より御教示、御助言を賜った。
阿部芳郎、小野昭、栗島義明、桑野一幸、駒形敏朗、高橋保、寺内範夫、橋本真紀夫、
藤巻正信、村田章人、山口栄一（敬称略、五十音順）

I 遺跡概観

新潟平野の西縁に連なる弥彦・角田山塊の北端角田山(481m)は、平野に面した東麓に広大な低丘陵や山裾平坦地を形成する。大沢遺跡は山麓の北東部、巻町大字稲島字馬渡・諏訪・明後沢地内に所在する縄文時代集落である。

● **立地** 角田山の北東麓には沖積地を急斜面で画した段丘状平坦地が南北2.5kmにわたって展開する。遺跡はそのほぼ中央部、大沢・ワゴ谷・明後沢に開析された2つの尾根上に立地する。その広がり東西600m、南北300m、垂直分布にして60~30mの間に及び、弥彦・角田山塊の縄文時代遺跡中最大規模を誇る。沖積地との比高は平坦地末端で20mあまりを測る。遺跡が広がる2つの尾根は、地形等に基づき、北尾根低域の平坦地(C地区)、その高域緩斜面(A地区)、南尾根西部(B地区)、東へ向けて突出する尾根先端部(B'地区)に区分されている。

● **調査** 上記のような遺跡の広がり、主として1970~71年に行われた柿団地造成工事に際し縄文中・後期の遺物が大量に出土したことから明らかになった。以後本遺跡では、新潟大学考古学研究室によるB地区・B'地区の発掘調査が1979年から計4次、1981年には静岡大学を中心とする研究グループによる古環境復原調査がB'地区直下の沖積地で行われ、縄文中期を主とする捨て場の検出や前期相当層準における淡水域の形成確認などの成果をおさめた。また、新潟大学考古学研究室による表面採集調査もなされており、本項末尾に主要文献を掲げる。

● **遺跡の構成** 第2図は柿団地の造成時やその後の調査でえられた知見に基づき、谷斜面に形成された遺物包含層(捨て場と仮称する)の推定範囲を示したものである。現時点で確認できた捨て場は、Ⅰ大沢に面したA地区北斜面、Ⅱワゴ谷から沖積地に面したC地区南~東斜面、Ⅲ明後沢に面したB地区南斜面である。これらはいずれも中期前葉の遺物を多量に包含しており、土器形式の上では同時期とみなされる。捨て場相互の位置関係はそれぞれ100m以上の隔たりをもつ。またⅠ・Ⅱの間には遺物空白地帯が存在したといわれ、ワゴ谷の南斜面でも中期前葉土器は稀薄なようであった。捨て場分布にみられる以上のような在り方は、各々の廃棄ゾーンに対応する住居ブロックの存在を十分予測させるものである。各ブロックは捨て場相互の間隔や空白地帯の存在からして独立した小集落をなす可能性がある。仮にこれらが同時に存在したとすれば、単一もしくは数軒の住居群が尾根や高度を異にし散在する様をイメージすることもできよう。小規模集落集合体としての大沢遺跡像である。なお、今回の調査は捨て場Ⅰに隣接しA地区住居ゾーンの一部と予想される字馬渡2694番地2を対象としたものである。

● **主要文献** 甘粕健ほか編(1981)『大沢遺跡—B'・B地区の調査概報』巻町・潟東村教育委員会
小野昭編(1982)『大沢遺跡・Ⅱ—第3次調査概報』新潟大学考古学研究室
新潟大学考古学研究室(1986)『FIELD NOTE』第4号



No.	遺跡	時期	前期末葉		中間前葉		中間		標高					
			中	新	古	中	新	中葉	0	10	30	40	50	60
1	大沢	A地区	●	○	●	○	●	○	●	[Pattern]				
		B地区	●	○	●	○	●	○	●	[Pattern]				
		B地区	○	○	○	○	○	○	○	[Pattern]				
		C地区	○	○	○	○	○	○	○	[Pattern]				
2	北浦原	A					○		[Pattern]					
3	下稲場						○		[Pattern]					
4	イタチツツラ			○					[Pattern]					
5	定口						○		[Pattern]					
6	さかしの		○		○				[Pattern]					
7	布前	自			○				[Pattern]					
8	前表		○	○					[Pattern]					
9	久保				○	●	●	○	[Pattern]					
10	中田	観					○	●	[Pattern]					
11	南赤坂		●	●				○	[Pattern]					
12	重柳場遺跡群	重柳場	●	○					[Pattern]					
		遺跡群	○	○	○	○	○	○	[Pattern]					
13	松屋				●	●	●	●	[Pattern]					
14	藍		○	●	●	●	●	●	[Pattern]					
15	新谷						○		[Pattern]					

遺物量 ● 多量 ● 中程度 ○ 少量

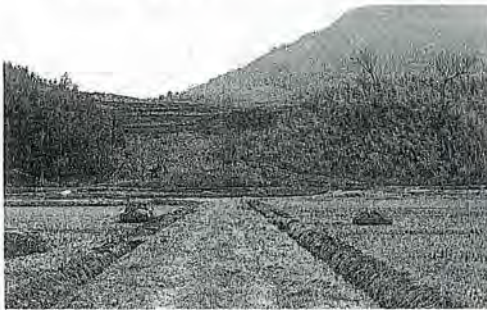
第1図 角田山周辺の地形と遺跡



1 大沢遺跡遠景(上堰潟東岸より撮影)



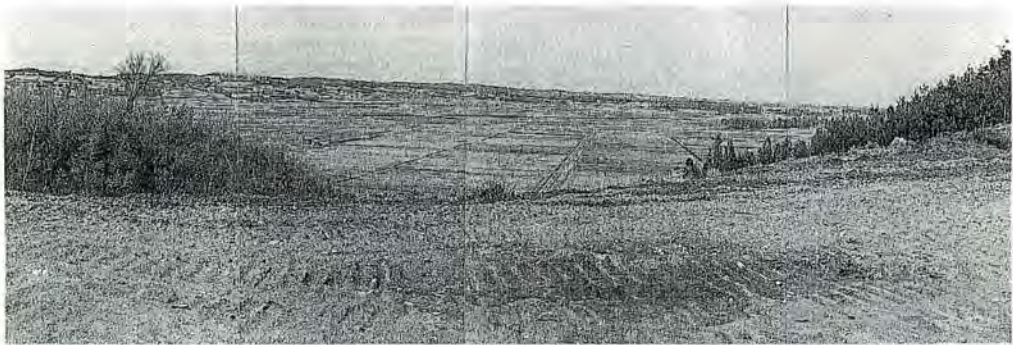
2 ワゴ谷



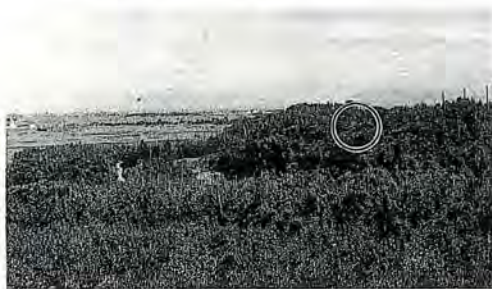
3 B地区(左造成区域)とC地区(右山林区域)



4 B地区北斜面からみたB'地区(山林区域)



5 B地区からみた沖積地と新潟砂丘

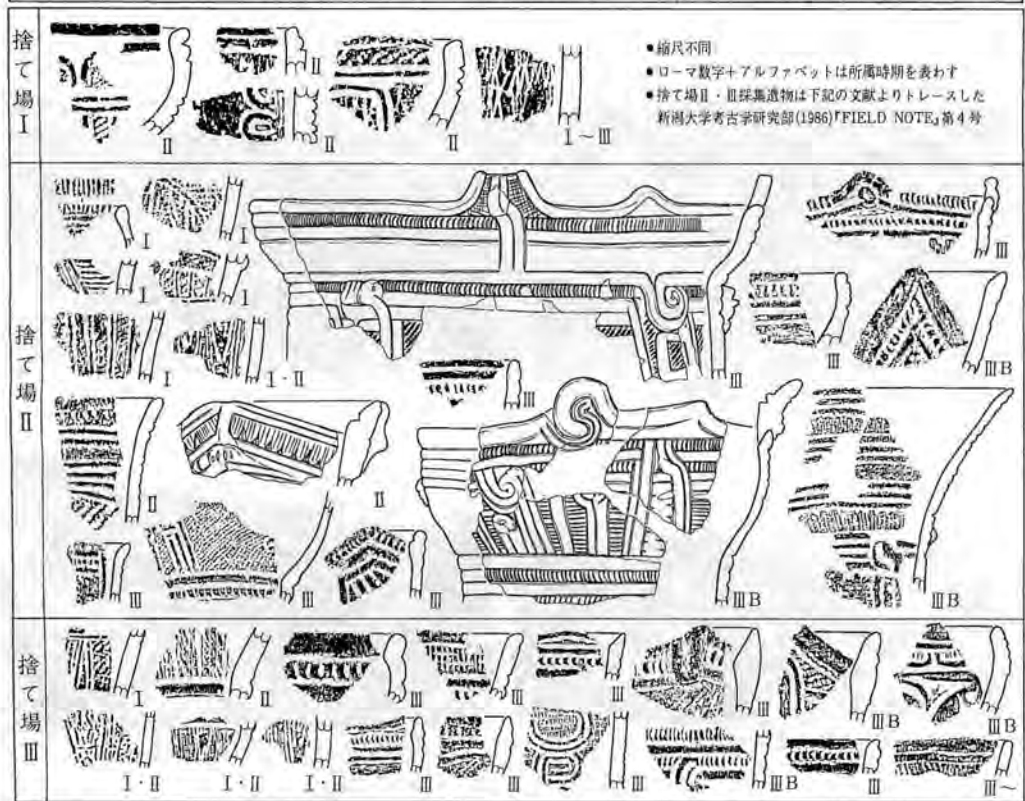
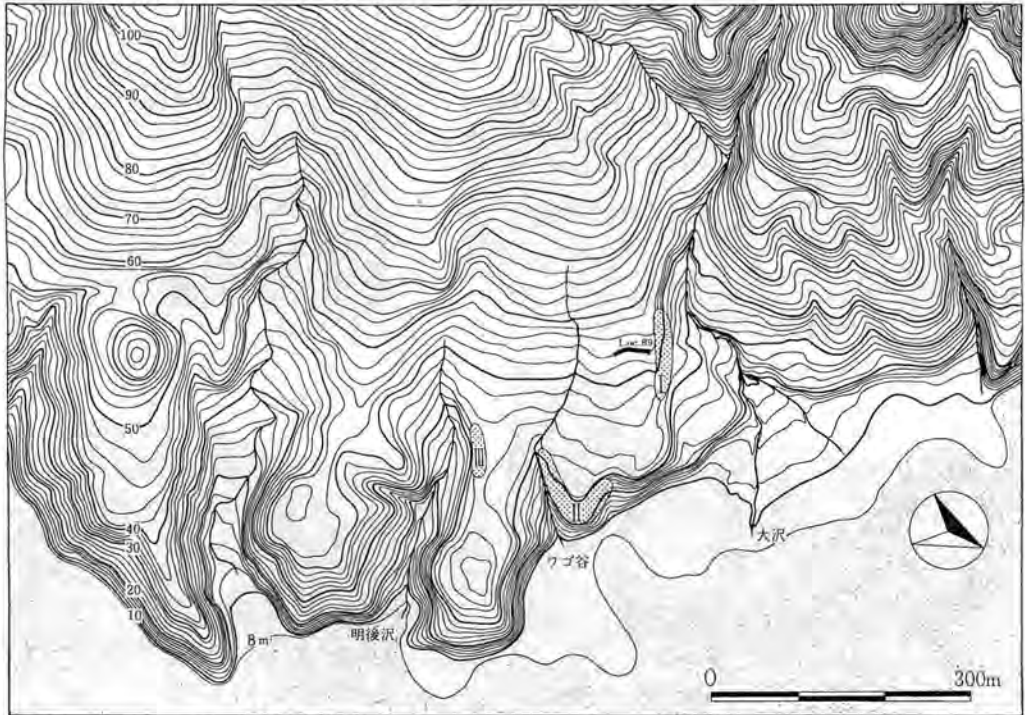


6 大沢北方からみた発掘地点



7 調査直前の発掘区(北方より撮影)

図版1 遺跡景観(2~5:1971年4月撮影)



第2図 遺跡周辺の地形と採集遺物

II 微地形と層序

● **微地形** 発掘区は北尾根高域部（A地区）の標高48m域に位置する。大沢とワゴ谷の間に形成された緩斜面の大沢寄りにあたり、大沢の谷斜面とは発掘区北端で3mを隔てるだけである。同地点における大沢との比高は20mを測り、急傾斜をもって谷底へと下降する。尾根の縦走傾斜の在り方をみると、本地区はほとんど平坦な西側尾根（50m域）が15%程度の斜度で下降する肩の部分にあたるため、基盤層上面地形や堆積土砂はいずれも下方へ向けて傾斜をみせる。第3図中央にV層（基盤）上面地形を示す。ほとんど平坦な現地表面とは異なり、E-3・D-3区に緩やかな尾根、C-5・D-5区とB-8・B-9区に凹地もしくは小規模な埋没谷が確認された。B-12区以南はすべて削平の形跡を認めるので、尾根中央の高まりが存在したことをうかがわせる。

● **層序** 計14か所の壁面で堆積層序を記録した。第3図には東西セクションを主に6面を示す。左下は大別土器群の出現傾向で、Ⅲ層末尾の数字は20cm単位の人工分層ナンバーを表わす。本地区における基本層序は以下のI～V層である。

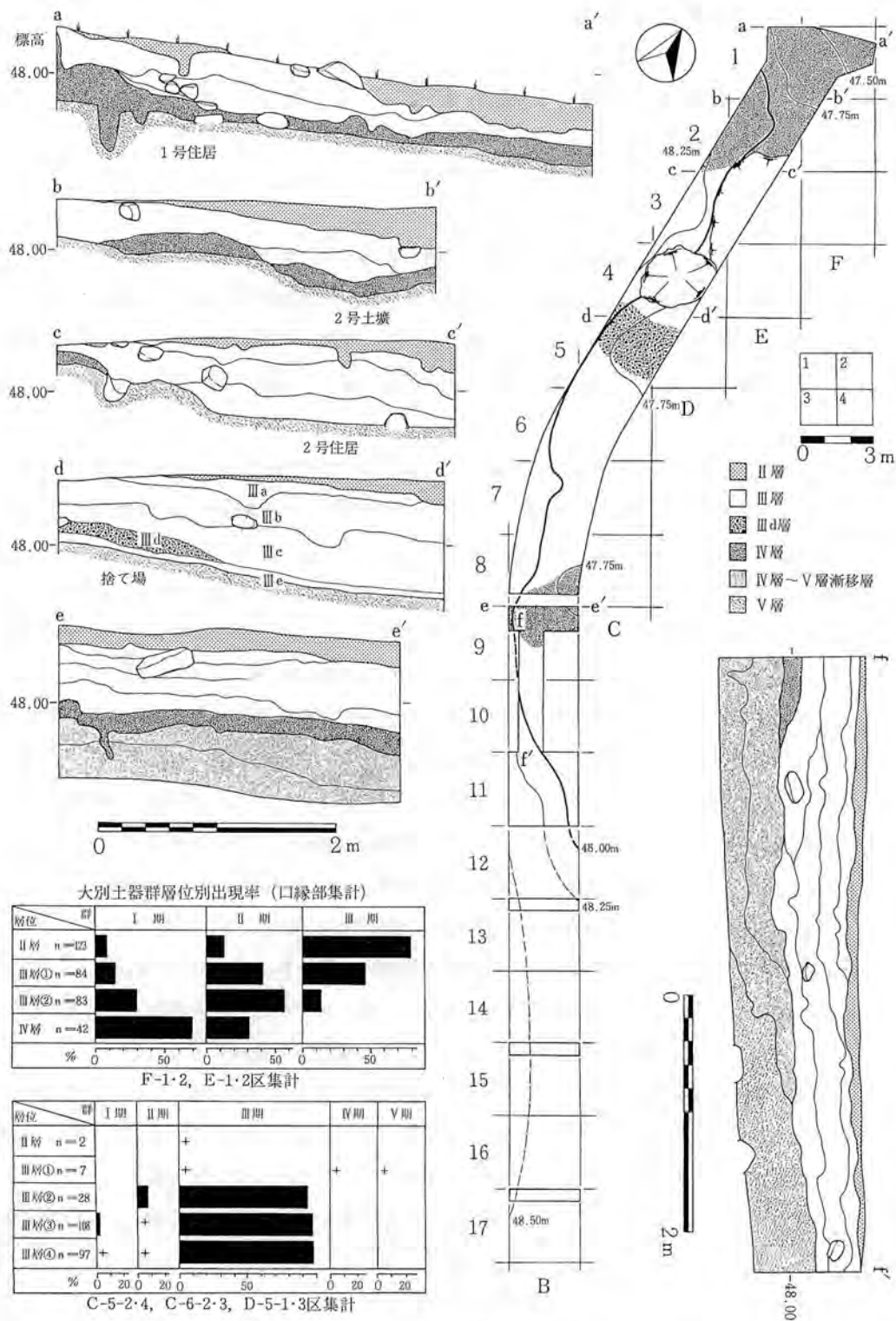
第I層 柿団地造成後の客土・碎石層。バックホーで除去したため層序図には欠落する。

第II層 旧表土。黒褐色を呈し粘性・しまりに欠ける。最大40cmの層厚をもつが、各区西側の削平が顕著である。発掘区北部ではⅢ期土器群の主体的な包含が確認された。

第III層 II～Ⅲ期の主要包含層で、削平をうけたB-12以南を除く全域に堆積する。壁面ごとに多少様相を異にするが、ここでは最も厚い堆積を認めたD-5-1区の在り方を記す。同地区における堆積厚は80cmを有し、Ⅲa～Ⅲeの5層に分層された。Ⅲa（暗褐色粘質腐植土）層は粘質土の小ブロックと軟質土の混在層、Ⅲb（暗褐色腐植土）層は軟質土層である。Ⅲc（暗褐色粘質腐植土）層以下は粘性に富んだ密な堆積土へと移行し、Ⅲc～Ⅲd層の間で多量のⅢ期遺物が包含される。このうちⅢd（黒褐色粘質腐植土）層はC-5・D-5区の谷部に分布が限定されており、多量の炭化物片の含有を特徴とする。Ⅲe（茶褐色粘質腐植土）層はV層への漸移層である。以上の各層には量の多少はあるものの黄褐色岩石微粒子の混入を認める。混入量としてはⅢa層からⅢd層へ向かうにしたがい増加する傾向にある。

第IV層 灰黒色～黒褐色を呈し強い粘性をもった腐植土である。岩石粒子の混入は微量にとどまる。本層は調査区北部とB-8・B-9区の谷部に分布域を形成する。前者は平均20cm程度の層厚をもつ。灰黒色を呈しV層との区分は明瞭である。主としてI期土器群を包含する。後者は谷部にのみ10cm程度の薄層として堆積する。前者にくらべ淡色化しており、V層内に多量の指頭大ブロックを混入させる。遺物量は少ないが、I～II期土器を包含する。

第V層 黄褐色～赤褐色粘土層。無遺物層である。



第3図 V層上面地形と堆積層序

Ⅲ 遺構と遺物分布

● **遺構** 調査区北部の尾根周辺から住居址2軒と土壌2基が検出された。2号住居の南に接する不整楕円形の落ちこみは、土層堆積の在り方から倒木痕と判断した。

1号住居（Ia～Ib期） 調査区北端からの検出。西壁、地床炉と3～4の支柱穴が確認された。平面プランは楕円もしくは長方形、規模は4.5m×3m程度と推定される。尾根のいくぶん下手に位置しており、主軸は等高線と同一方位をとる。地床炉の平面形は不整形をなす。最大長55cmを測り、西側にのみ硬質焼土を認める。

2号住居（Ⅲb期） 尾根中央に位置する。北壁の一部と西壁を検出したのみで、西壁南部は倒木痕によって断ち切られる。平面プラン、全体規模とも不明であるが、大形住居の可能性も考慮される。最大壁高は西壁中央で60cmを測る。壁外周にみられるピット列は、本住居の上屋構造の在り方と関連し注意されるところである。

1号土壌（Ia～Ib期） 楕円形をなす落ちこみで、平面90cm×75cm、深さ45cmを測る。土層観察ラインが設定できなかつたため、1号住居との先後関係は不明である。

2号土壌（Ib期） 平面楕円形、深さ30cm弱の皿状の落ちこみである。南北幅は1.1mを測る。壙底および覆土内からIb期土器群がまとまって検出された。

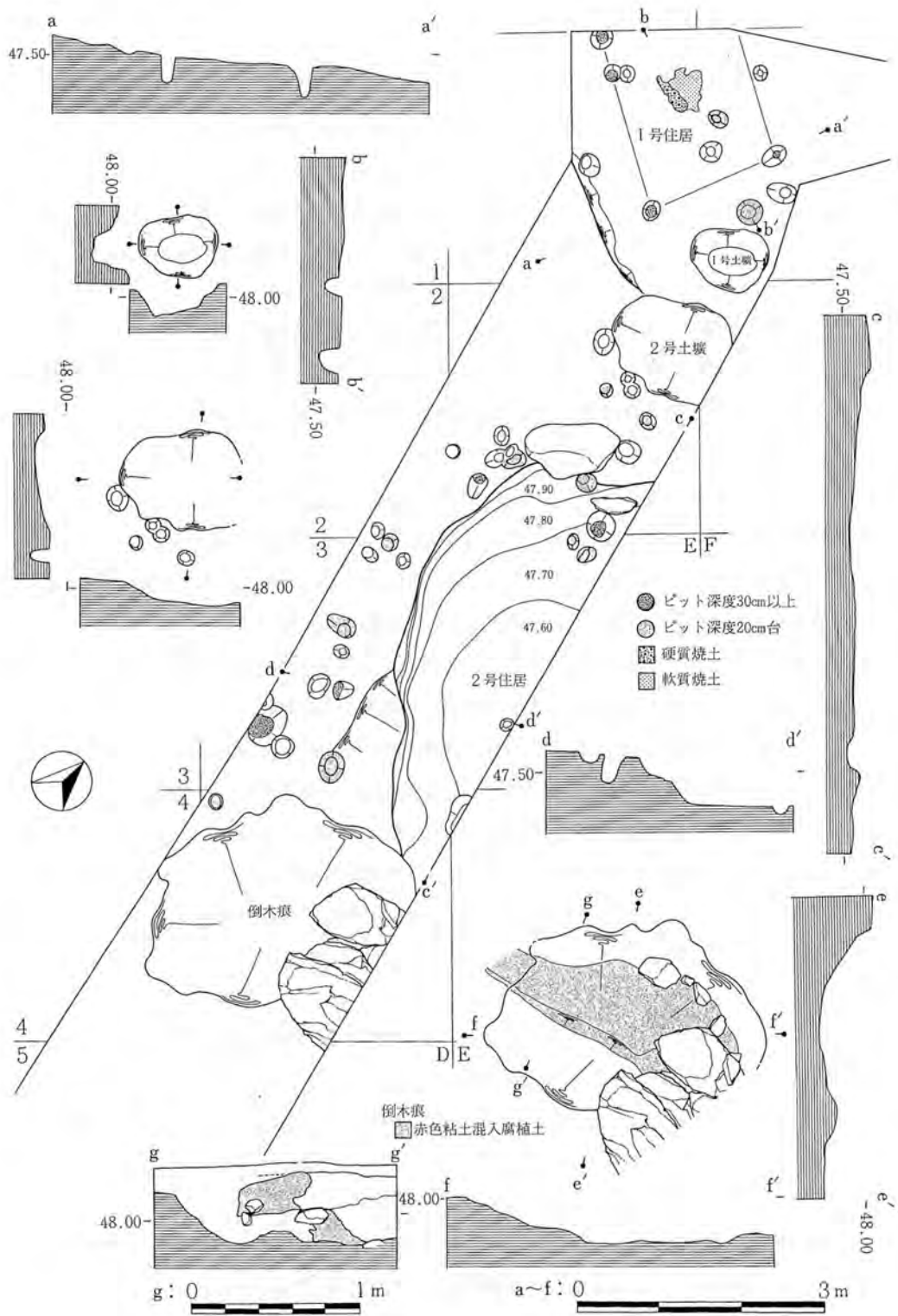
● **遺物分布** 主として土器の出土分布から発掘区内における空間利用の変遷を概観する。各時期の遺物分布と土器出土量（口縁部集計個体数）の推移は第5図のとおりである。

I期 Ia～Ic期に細分される。このうち、Ia期（前期最終末）の遺物は本遺跡初の検出で、現時点では集落形成期の上限を示すものである。細別各期の遺物分布に有意な差がみだしたがいたため一括表示する。本時期の分布は調査区北半にほぼ限定されており、北端の1号住居や2号土壌周辺で中密度ゾーンを形成する。検出グリッド23区の平均出土個体数は5.0を記録する。

II期 全体的にみればI期と同様、調査区北端に中心的な分布域を形成する。しかし、遺物総量の増加（1.7倍）や高密度グリッドの出現がみられ、分布域もしだいに南部へ拡大する傾向を示す。

III期 a・b 2期に細分されるが一括表示する。本時期の土器個体数は1150あまりを数え、II期とくらべ約6倍の増加をみせる。分布範囲もほぼ全域におよび、欠落グリッドは9区（14%）を数えるのみである。本時期に至り、中心的な分布域は調査区中央の3～7列に移動する。とくにC-5・C-6・D-5区ではⅢd層を中心に大量の遺物が検出されており、谷部を利用した集中的な捨て場空間の形成を物語る。

IV期～VI期 遺物量は一転して激減し、調査区中央部に散発的な出土を認めるだけとなる。各時期の検出土器量は、IV期8個体、V期7個体、VI期1個体を数えるのみである。



第4図 遺構と倒木痕



1号住居(南より撮影)



2号住居(北西より撮影)



調査終了時の発掘区(北より撮影)



2号住居と外周ピット群(南より撮影)



2号土壙(真上より撮影)



倒木痕(南より撮影)

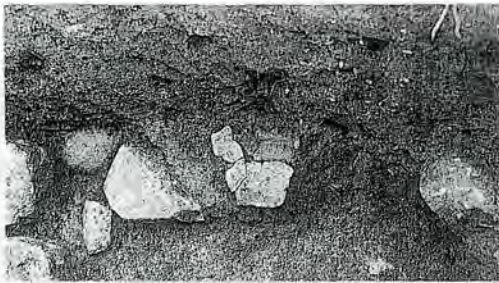
図版2 遺構と倒木痕



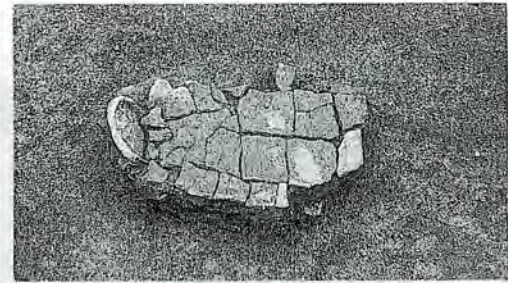
C-5-1~4 III層④—捨て場下層(III期-102)



C-5-2 III層④—捨て場下層(III期-66)



C-5-1 III層③—捨て場下層(III期-71)



C-6-1 III層③—捨て場下層(III期-74)



C-6-2 III層④—捨て場下層(III期-94)



C-5-4 III層③—捨て場上層(III期-78)



E-1-4 III層①(II期-64)



F-1-3 II層(III期-91)

図版3 土器の出土状態(括弧内は本書実測図番号を示す)

IV 遺物

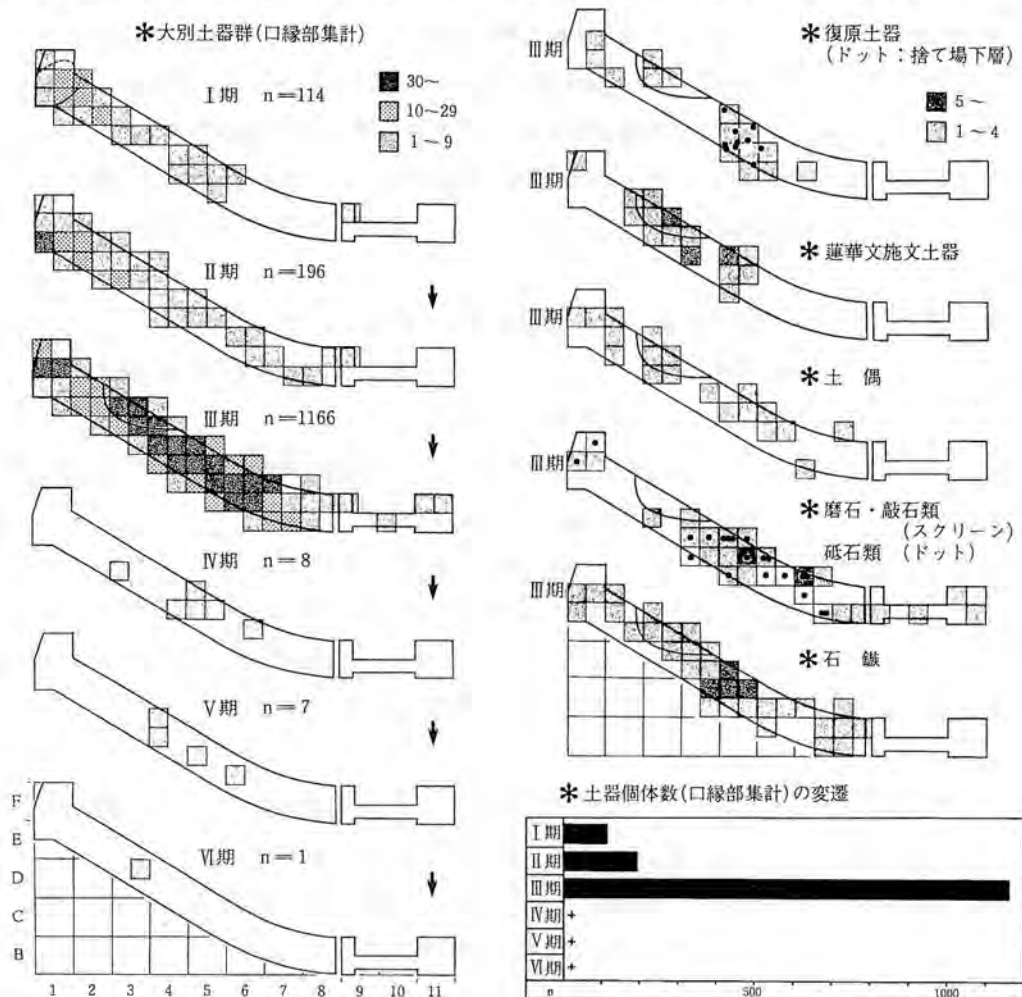
1 縄文土器 (第6図・7図・9図~12図)

調査区全体で1700個体(口縁部集計)あまりが検出された。うち86%, 1492個体について所属時期の特定が可能であった。大別時期の内訳は下記のとおりである。本項では主体を構成するI~III期土器群の概要と木目状燃糸文の原体について述べる。なお、I~III期の先後関係については、発掘区北部の層位別集計結果(第3図)からも妥当性が検証された。

I期: 前期最終末~中期前葉古段階 II期: 中期前葉中段階 III期: 中期前葉新段階
IV期: 中期中葉 V期: 中期後葉 VI期: 後期前葉

● I期 (第6図)

北陸編年における朝日下層式から新保式II期までの間に対比される土器群である。



第5図 遺物分布と土器個体数の変遷

A 在地系（1～3・5～18） 当地域の主体をなすグループである。前・中期の線引きに問題を残すが、おおむね3段階の細分が可能であろう。

- Ia期（1～3） 浮線を文様要素とするグループで、図示の3点がすべてである。細片ながら1・3の浮線文貼付手法に北陸の朝日下層式（前期最終末）的な特徴を認める。
- Ib期（5～16） 卷町豊原遺跡V群古段階（北陸編年新保式I期）に併行し、I期の主体を占めるグループである。実態としてはIa期と一部重複する可能性もあるが、型式学的な観点に基づき本期を設定しておく。

本時期土器群は、基本的には豊原遺跡と類似した様相を示す。すなわち、内屈もしくは内湾口縁の盛行、口縁部文様における斜行格子目文の多用（45%—以下Ib・Ic期全体集計値）、口端および口縁部文様帯区画隆帯上における縦位撚糸施文の卓越（62%）などである。その一方で、口縁部文様に採用される縄側面圧痕ないし横位撚糸文（5～7・9）の割合が24%、口端等の連続爪形文（7・10・11）施文率が27%の数値を示す点は大きな相違である。とくに後者は豊原の3%（200個体のランダム抽出資料集計値）と著しい開きをもっており、北陸の新保式との深い関わりを考慮すべき様相を示す。竹管集合沈線と横位撚糸文を複合する7・9や、口縁部文様帯の中で斜行格子目文と連続山形文が対をなす10・15なども本遺跡を特徴づける文様パターンである。該期資料が大量に出土した豊原でこれらが欠落する点も留意する必要があるう。

- Ic期（17・18） 豊原V群新段階（北陸編年新保式II期）に併行する時期である。資料数が乏しいため具体的な様相は明らかでない。第7図64の浅鉢は出土層準や共伴土器に基づきII期としたが、口端形態からみると本期に属する可能性もある。

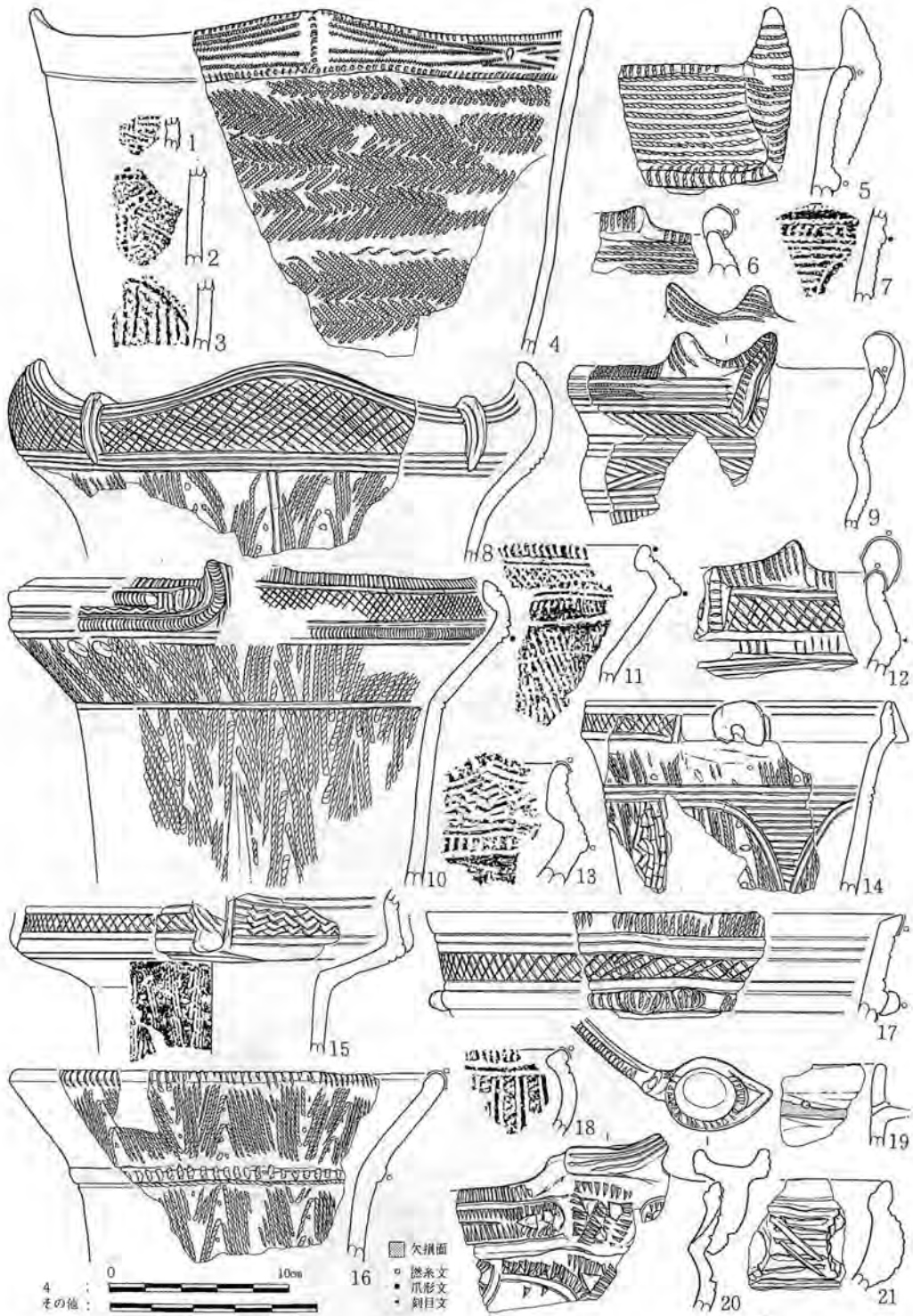
B 東北北部系（4） 4は1号住居床面より出土した円筒下層d式系土器で、在地系Ia期に併行関係が求められる。口縁部の帯状文様は絡条体圧痕である。

C 関東・中部系（19～21） 20・21は五領ヶ台I式系土器である。豊原遺跡でえられた層位的な知見にもとづけば、前者は在地系Ib期、後者はIc期に伴うものとみられる。19は1号住居床面から検出された有孔罅付土器で、在地系Ia期ないしIb期に比定できる可能性が高い。細片ながら現時点では新潟～北陸における上限を示す資料である。

- II期（第7図）

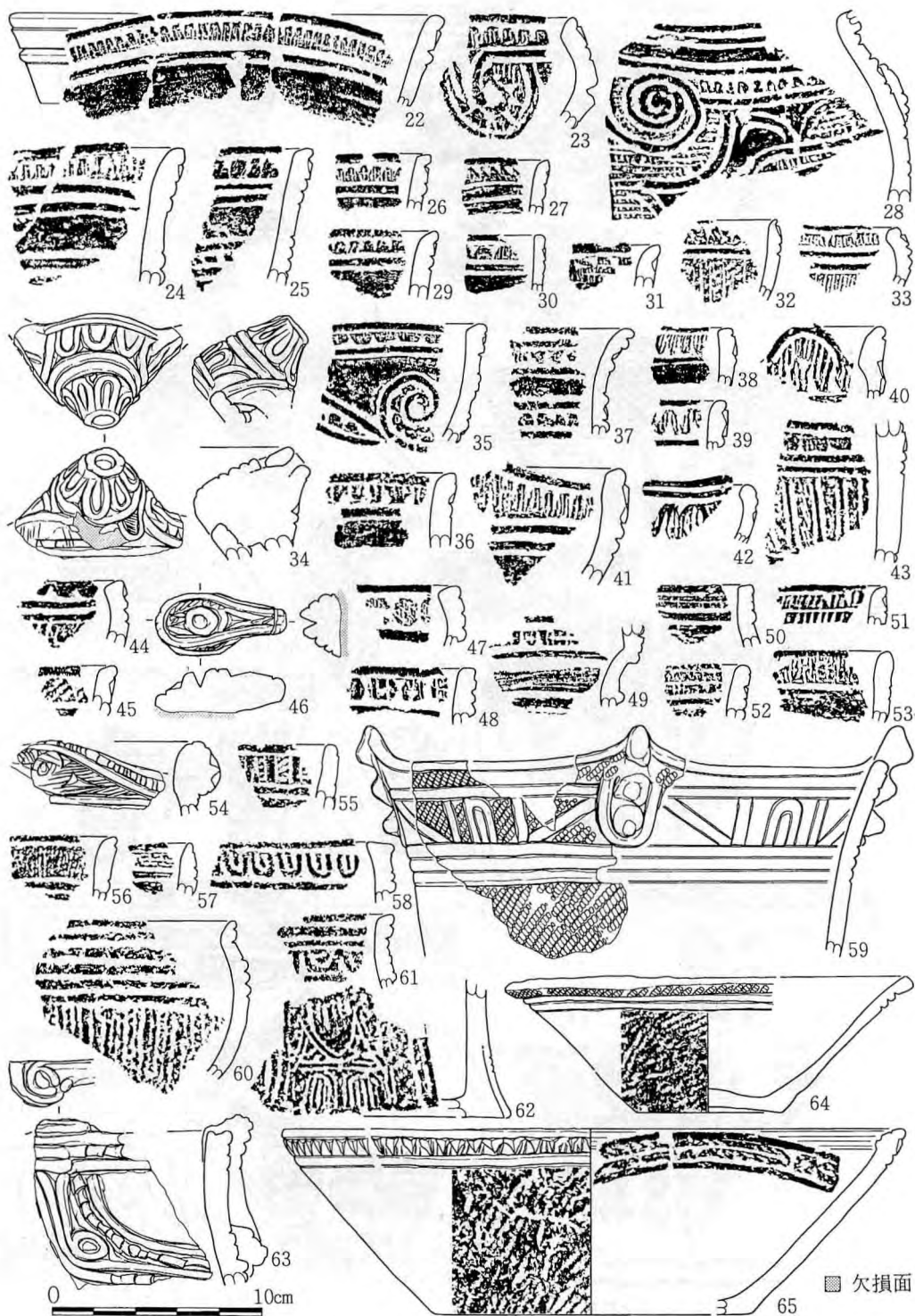
北陸編年における新保式III期や徳前C期、厳照寺I式土器に対比され、当地では豊原VI群と併行する土器群である。異系統とみなすべき資料は検出されなかった。

検出資料のおよそ3分の2（130点）を占めるのは、口縁部に設けた横位区画帯に各種文様を充填するグループである。これらはおおむね、a彫刻蓮華文（22～42）、b三角形印刻文（43～46）、c縦位細線文（53）、d六角形鋸歯文（47・48）、e軌軸文（49～52）、f細線内彫



第6図 1期土器群

(1号住居床面：4, 19 2号土壇底面：8, 10
 1号住居覆土：12, 14, 15 2号土壇覆土：5, 9, 11, 16, 20)



第7图 II期土器群 (42·44·47: 1号住居覆土, 62·64: Ic期~II期)

去文(54)の6種に大別される。施文頻度としてはaの卓越(82%)を認め、他はeの8%を最高とするにとどまる。本グループの主体を占める彫刻蓮華文は、細線施文の後ヘラによる三角形彫去を複合させるものである。彫去部位により①正位(22~33)、②逆位(34~38)、③正逆交互(39)、④正逆共存(40~42)のバリエーションを認めるが、主体は①(73%)・②(23%)の2種で、後者の中には下段に①を配す資料(35・37)もみられる。細線の施文方向はタテが圧倒的に多く、①に斜位(25)や格子(31)が散見されるのみである。充填文様の別に関わりなく、口縁文様下には無文帯を設けるケースが一般的なようである(22・35・41・50・53など)。充填文様帯以下が遺存する43点中31点にこれを認め、他は縦位沈線(32・33)の5点が目だつ程度である。本グループにみられる以上のような特徴は、出雲崎町タテ遺跡や近隣の豊原などでも認める一般的な様相であり、当地の実態を数量的に把握しうる好資料といえよう。

上記以外は量的なまとまりに欠けるグループである。とくに、豊原遺跡で彫刻蓮華文などと共に主要グループを形成するVI群3類土器(第20図)が微量の出土にとどまることは注目すべき事実である。本地区区検出資料の中で同一と認定できる資料は口縁区画内に横位撚糸施文がなされた57一片のみで、強いてあげれば55・56・59などに類似性が指摘できるにすぎない。角田山麓には本時期に属する集落遺跡が他に2か所しられている。しかし本地区区同様、類似資料は1~2点を認めるだけで、大沢遺跡B・B'・C地区報告資料の中にも該当例は皆無である。さらに探索範囲を広げてみても、断片的な資料の出土が数遺跡で報じられるのみで(第20図)、豊原VI群3類土器の特異性を改めて認識させるものである。

● III期(第9図~12図)

北陸編年における新崎式に対比される土器群である。一括資料の乏しい新潟県内海岸部では最もまとまった資料として重要である。

A 在地系 新旧に二分される可能性が高いが、先ず本時期土器群にみられる全般的な特徴について概観する。構成器種は深鉢・鉢・浅鉢の三種である。後二者は好資料を欠くため深鉢の特徴のみを記す。器体上半器形の基本はキャリパーと外反形である。前者は、A頸部から急激に外反・屈曲するもの(66など)、B立ち上りが緩やかなもの(74など)、Cくの字状をなすもの(89)に大別され、Cは微量にとどまる。体部はおおむね円筒形をなすが、底部が張り出す可能性のある個体(68)も例外的に含まれる。多くの個体が口縁部に4ないし2単位の小突起をもつようで、明らかに平縁と認めるのは73のみである。少数ながら4単位の大波状をなす個体もみられる(66・75・79・80)。波状突起を連続させる71は一見して火焰型土器との類似性を認める資料である。しかし本例以外に該当資料がないため、類似性の指摘にとどめる。

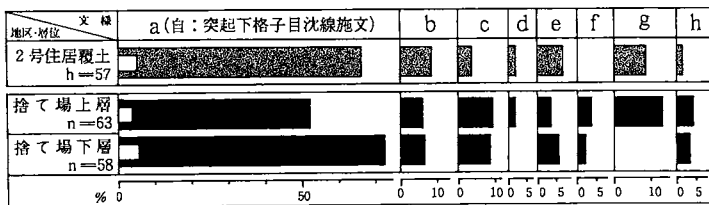
口縁文様は、無文帯の有無を問わなければ大略8種が確認できる。内訳は、a竹管平行沈線+連続爪形文(66など)、b横位竹管平行沈線のみ(82)、c横位区画内に(以下hまで同じ)

縦位竹管沈線を充填 (91・93・94), d 縦位刺突, e 粗大蓮華文 (83・86), f 縦位細線 (84), g 竹管の先端刺突による真正な蓮華文 (87~90・92), h 格子目文 (85) である。このうち c は、体部突起に e を併用する 91 の例からも蓮華文の簡略形とみることができる。e における細線方向は格子目をなすケース (83) が多く、h との類縁性を物語る。また、a や c の中には突起下にのみ h を施す個体 (76・77・93) も存在する。体部文様は、縄文を地文とするグループと縦位区画内に格子目沈線を充填するグループに二大別される。両者の具体的な数量比は提示できないが、復原個体に基づくかぎり前者 3 対後 1 程度の割合と予想される。体部文様が単位をなす場合、前者の多くは口縁単位と一致する。しかし後者の中には半単位のズレをもつ資料 (66・68・71) が少なからず含まれており、文様描出原理の異なりを示唆している。

本期細分案を以下に示す。第 8 図は口縁部文様の分類別出現率を地区・層位ごとに比較したもので、捨て場資料は準完形個体の集中出土をみた下層 (Ⅲ層④およびⅢd層一括とりあげ資料) と破片資料を主とする上層 (C-5-2・4, D-5-1・3, D-6-2~4 区Ⅲ層③~②資料) を別個に集計した。

● Ⅲa期 捨て場下層資料をもって本時期とする。第 8 図でみるかぎり、2 号住居覆土や捨て場上層資料との間に大差はないが、それらで安定的に出現する蓮華文の欠落を一つの特徴とする。蓮華文施文資料が捨て場下層の準完形個体群と分布域を異にする (第 5 図) ことも両者に存在する若干の時間差をうかがわせる。本時期の編年の位置については、捨て場下層で共伴した五領ケ台Ⅱ式類似資料や猪沢系土器、円筒上層 b 式系土器が重要な指標となる。

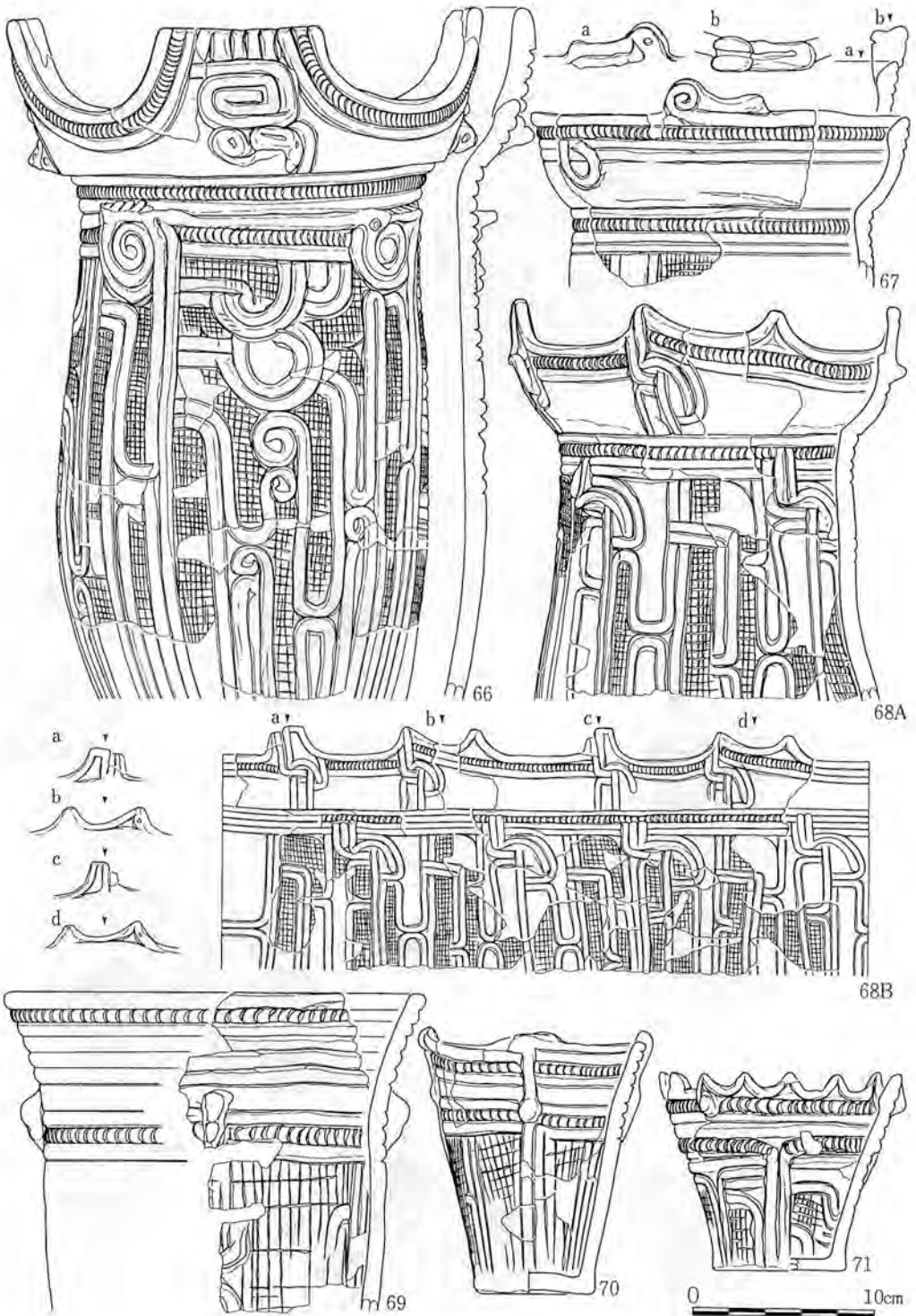
● Ⅲb期 捨て場上層資料や 2 号住居覆土出土資料をⅢb期とする。全体的な土器様相はⅢa期に類するが、三島町千石原遺跡Ⅰ群土器や長岡市山下遺跡の中期中葉資料を特徴づける諸要素の存在が重視される。すなわち、①各種彫去文を伴う山形大波状口縁 (80), ②異種原体併用竹管沈線 (81), ③無文帯内楔状刻目文 (90), ④キャリパー器形 C (89) の存在であり、例示した 2 遺跡では蓮華文もまた重要な構成要素となる。列記した 5 点のうち①~④は中期中葉へ受け継がれる要素でもあり、本時期土器群の後出性を物語る。ちなみに、本地区Ⅲb期に



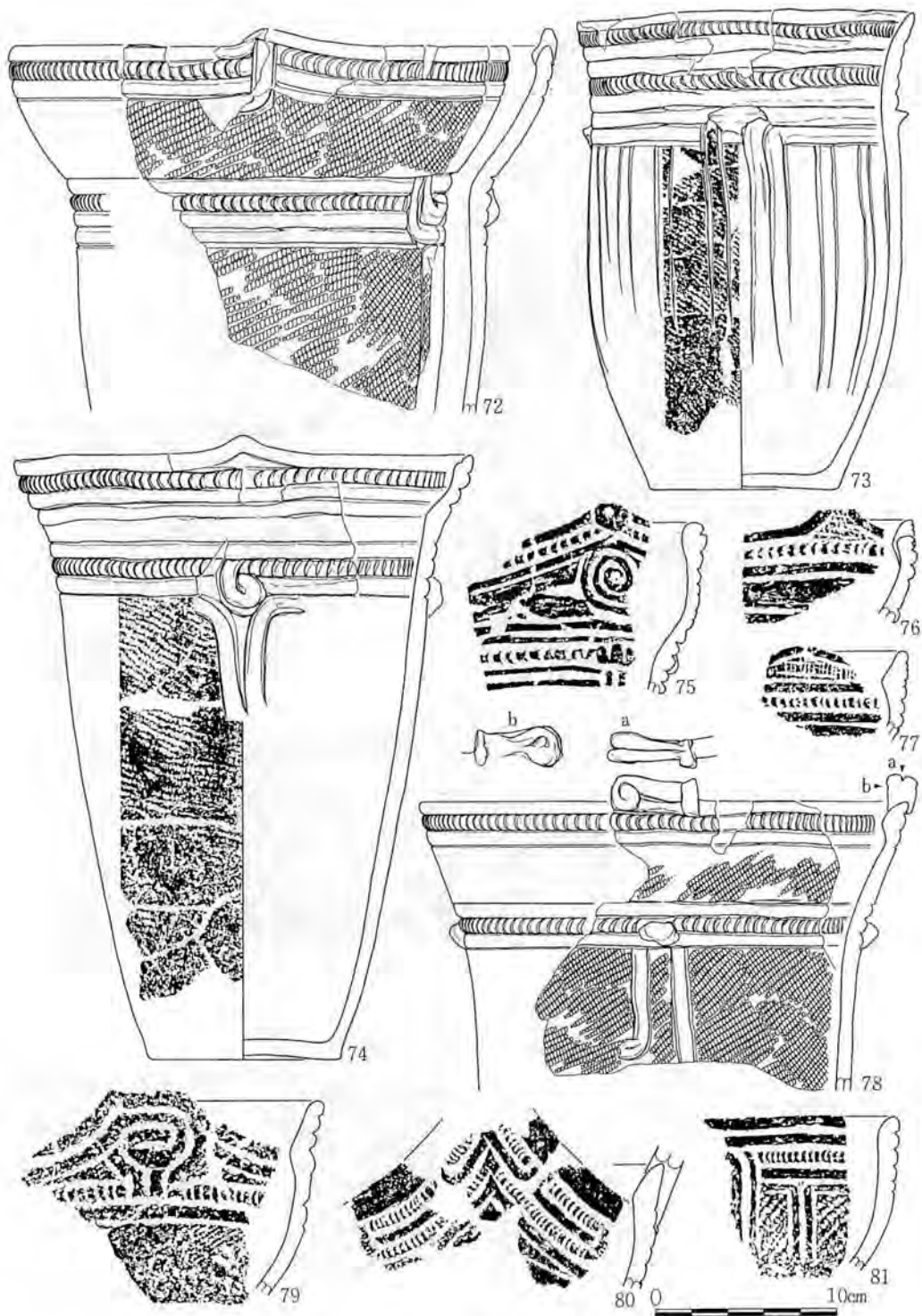
第 8 図 Ⅲ期土器群地区・層別口縁部文様出現率

における蓮華文の出現率は、近隣の松郷屋遺跡とくらべて目だって高い数値を示すようである。Ⅰ・Ⅱ期同様、近隣遺跡間にみられる土器様相の異なりが留意される。

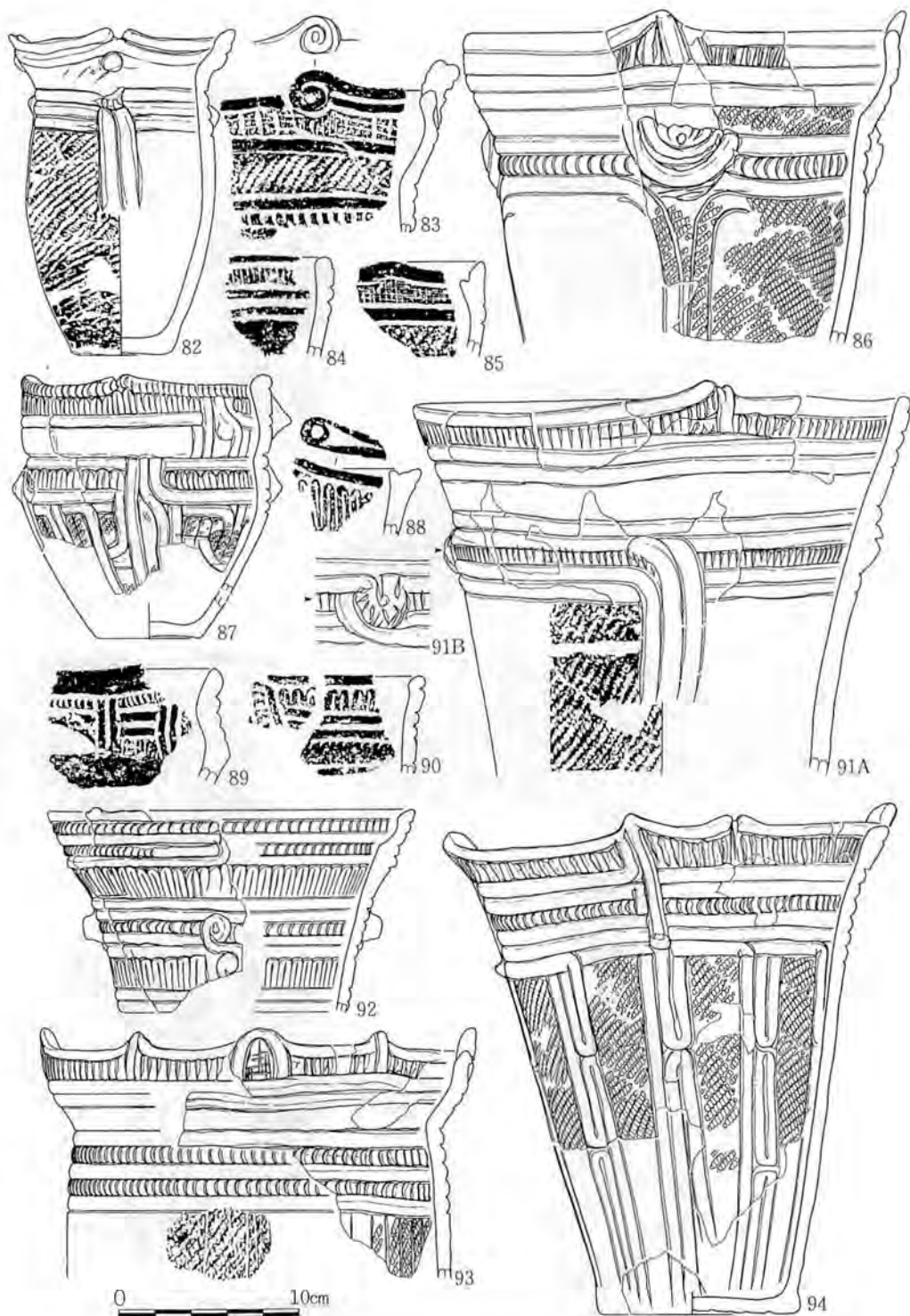
B 東北北部系 (100) は捨て場下層より出土した円筒上層 b 式系土器で、他に細片が 3 個体分ある。図では判然としないが、隆帯上には撚糸文が施される。隆帯下文様は竹管刺突列。



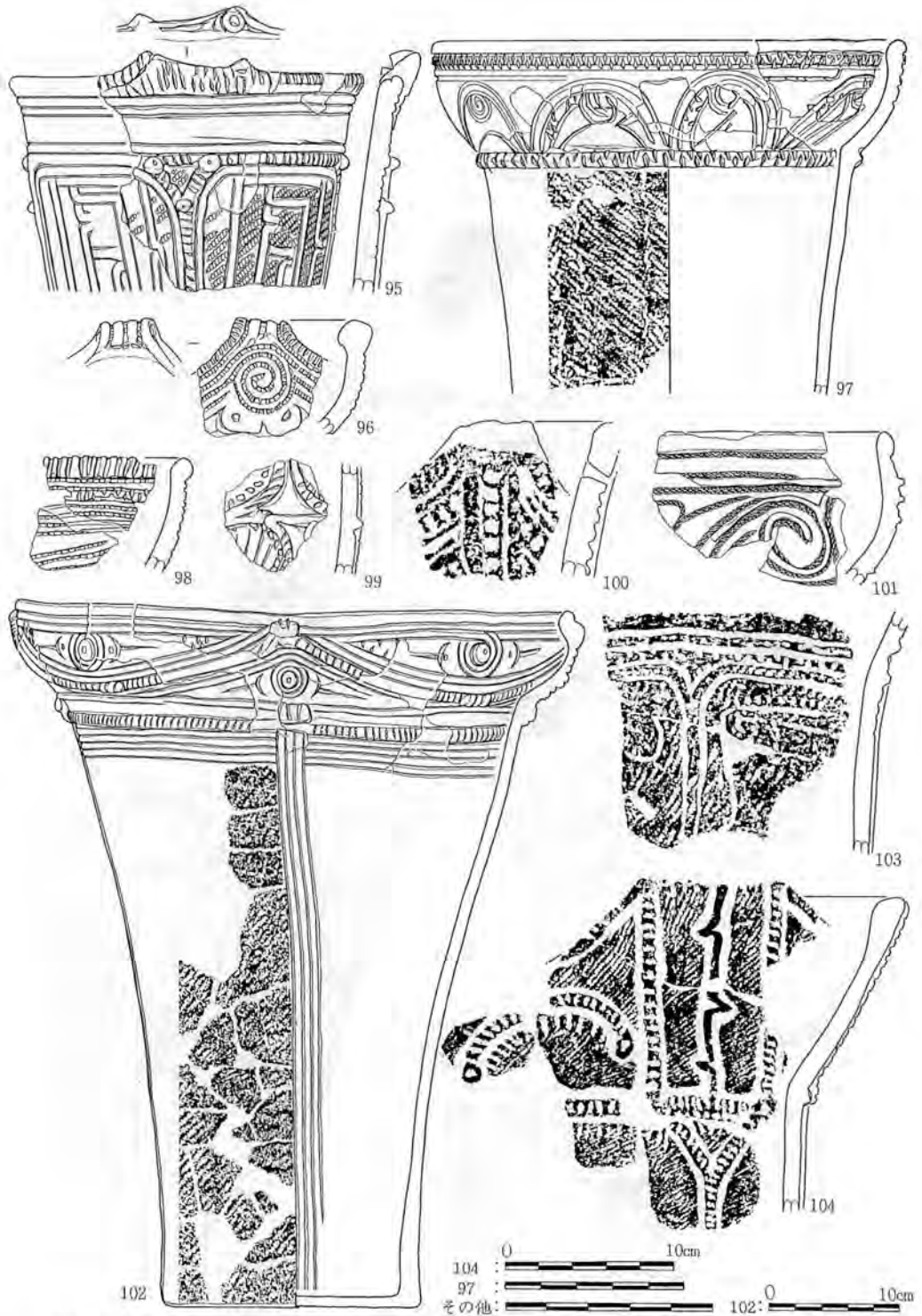
第9図 III期土器群(1) (66~71:捨て場下層)



第10図 皿期土器群(2) (72~75: 捨て場下層, 76~78: 捨て場上層, 79~81: 2号住居覆土)



第11図 Ⅲ期土器群(3) (86・94:捨て場下層, 82~85:捨て場上層, 87・92:2号住居覆土)



第12図 Ⅲ期土器群(4) (97・98・100・104:捨て場下層, 104:捨て場上層, 101:2号住居覆土)

C 東北南部系 (101・103・104) 大木7b式系土器である。口縁部集計4個体の出土にとどまった。103は鋸歯状文が施され、本系列の中では古様相を認める資料である。101は縄圧痕と浮線が併用される。104は大波状口縁の頂部を中心に幾可学隆帯を配し、波頂部や隆帯の上・裾に縄圧痕が加えられる。口縁部区画隆帯下のY字状垂下隆帯も特徴的である。

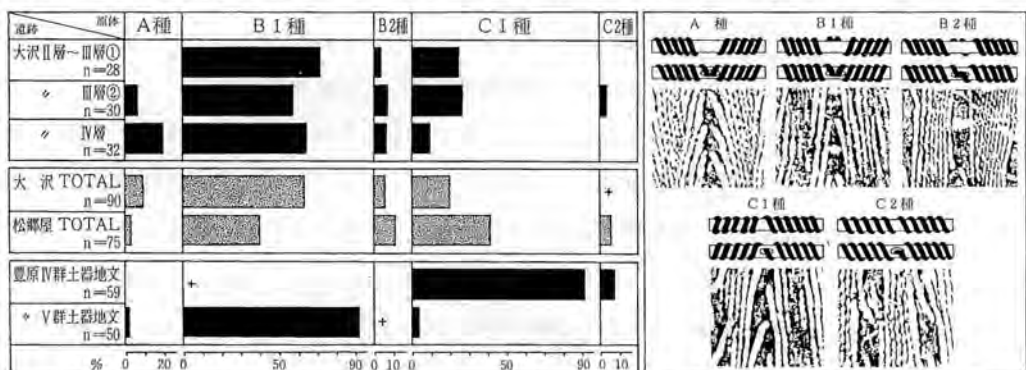
D 関東・中部系 (96~99・102) 本系列とみられる資料は次の3種である。①連続角押文によって口縁部文様を描くグループ。捨て場下層出土の97も一部にこれを認めるので同類とみなされる。97・98は鋸歯状文を複合する例で、類似資料が他に3個体分ある。96は五領ケ台直後型式、97・98は狹沢系土器の範ちゅうで捉えておく。②捨て場下層出土の102が唯一の資料である。器形・文様ともに五領ケ台IIc式的な特徴をもつが、在地系土器の中に類似モチーフ描出個体(75)が存在することから本期の所産とした。隆帯上に東北的な要素を認める縄圧痕が施されるので、異系統同居個体と考えられる。③2号住居覆土下部より出土した99のみである。細片のため明確な位置づけは困難であるが、楕円形隆帯に勝坂式的な要素がみられる。

● 木目状燃糸文

木目状燃糸文の原体構成の変化を層位的に確認するために、発掘区北部の7グリッド(E-1-2~4, E-2-2, F-1-1~3区)出土資料の検討を行った。判別できた原体は、軸孔を中心とした縄の巻き方に基づく5種である。原体の性状と施文状態については第13図右を参照されたい。なお、II層およびIII層①については出土数が乏しいため一括して集計した。各層の主要構成土器は、IV層がI期、III層②がII期、III層①~II層がII~III期である(第3図参照)。

結果を第13図に示す。原体別にみた出現率の在り方はA種とC1種が対称的な変遷をみせており、両者の使用頻度上の消長を物語る。IV層にみられるB1種の卓越はC1種に先行する現象であるが、以後III層②やIII層①~II層の間でも全く変化しておらず、III層②(II期)以降もC1種と共に多用された原体と考えられる。

第13図下に比較資料として近隣の松郷屋と豊原の数値を示した。新潟~北陸でこれまでえら



第13図 木目状燃糸文の原体構成

れた知見によれば、Ⅰ期においてはB1種、Ⅱ期においてはC1種を主とする傾向にあり、Ⅲ期に至ると新潟にのみC1種のわずかな残存が知られている。松郷屋はⅡ～Ⅲ期を主体としながらⅠ期土器群が付随する遺跡である。したがって、新潟～北陸の一般的傾向に照らしてみれば、同遺跡Ⅱ期における原体組成の実態はB1種をしのぐC1種の使用が予想され、本地区Ⅱ期とはいささか異なる様相を示すものと考えられる。一方、豊原遺跡ではⅠ期からⅡ期へ移行する過程において卓越原体がB1種からC1種へ急激に転換する現象が確認されており、B1種の高率出現を認める本地区とはまた著しい異なりが指摘できるのである。Ⅰ～Ⅲ期土器群にみられる遺跡変差とあわせ注目すべき現象といえよう。

2 土製品 (第14図)

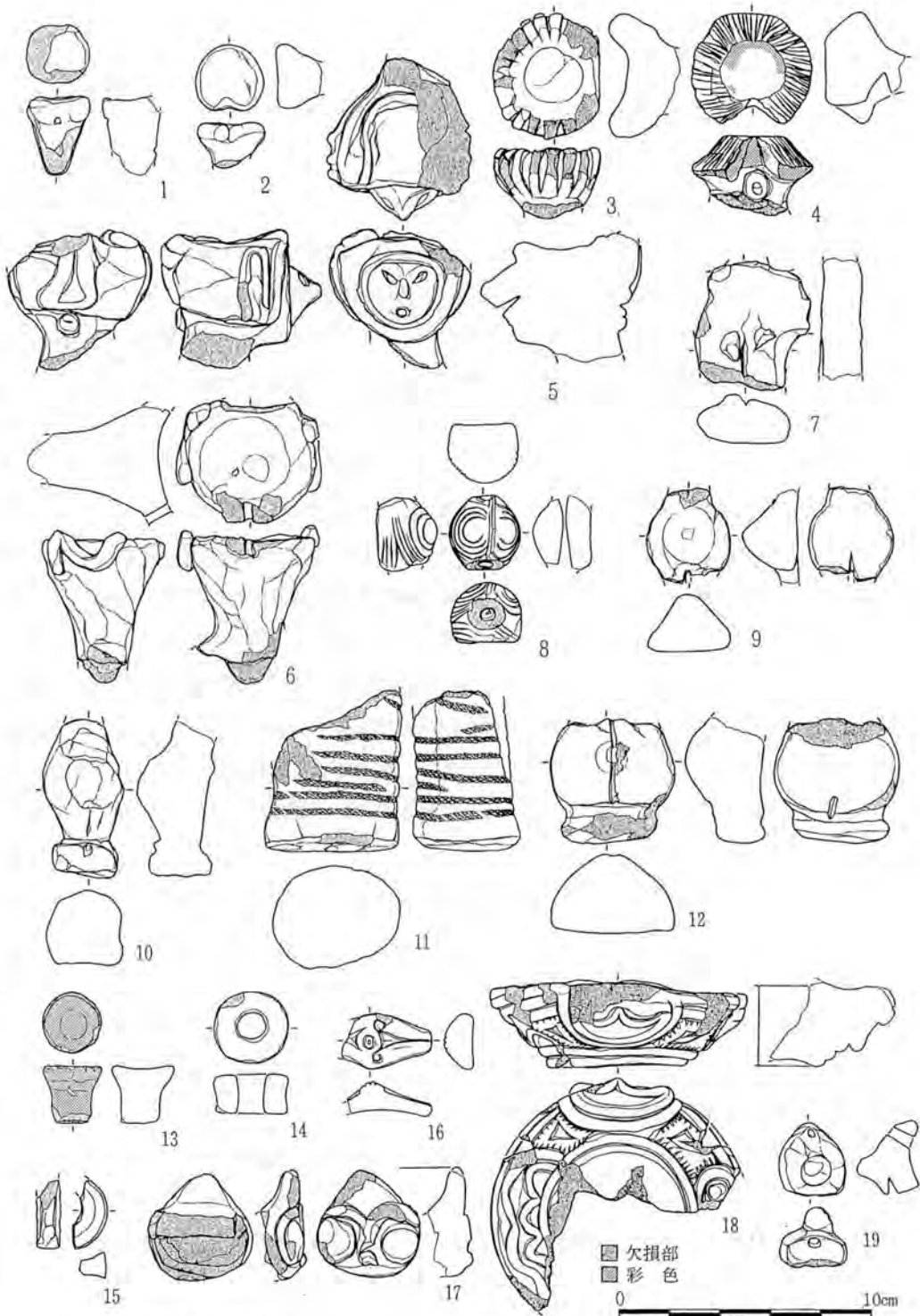
性格不明の資料を含め36点が検出された。内訳は土偶27点、耳飾類4点、球状土製品1点、焼成粘土塊1点、異形土製品3点である。特徴的な資料を第14図に掲載する。5・15・19以外はⅢ期の所産と考えられる。なお、土製円盤も確認されたが、本地区全般に土器の遺存状態が不良なため存在を記すにとどめる。17はⅢ期土器の顔面把手である。

●土偶(1～12) 調査面積の割に多量の資料が出土したが、Ⅲ期土器群との間に有意な分布差はみられなかった。部位別出土数は、頭部9点、体部12点、体部～脚部4点、脚部4点である。

1～6は頭部資料。1・6の破損面にはソケット状成形を認める。中部高地的な顔だちをもった5は顔面表現がなされた唯一の資料である。E-3-3第Ⅱ層からの検出で、中期中葉の所産と考えられる。顔面表現欠落個体の中には装飾文様を有する資料もみられる。3・6は隆帯貼付、4は細線施文がなされる例である。頭頂部の断面形は平坦もしくはゆるい皿状(1・2・4)と皿状(3・5・6)の二者からなり、前者の中には全体形が笠状をなす資料(4)2点が含まれる。両者の別に関わりなく、頂部に抉り(2・4)や孔(6)を施すものもみられる。腹部はすべて顕著なふくらみを有するが、沈線の有無や施文の在り方に若干のバラエティーをみせる。8は接着を意図したものか一孔がうがたれる。脚部の作出は不顕著で、両脚が一体化したり(10・12)欠落するケース(11)が一般的である。

●耳飾類(13～15) 内訳は抉状耳飾(15)1点、滑車状耳飾(14)2点、栓状耳飾(13)1点である。15は1号住居覆土Ⅳ層からの検出で、Ⅰ～Ⅱ期に比定できる。

●異形土製品(16・18・19) 名称を付しがたい3点をこれとした。19はⅠ～Ⅱ期の所産と考えられる。18は捨て場上層(Ⅲ層③・②接合)からの出土である。楔状刻目文の多用を特徴とし、Ⅲ期土器群の中でも新要素を具現した資料である。径の2分の1を遺存するが全体形は定かでない。19は完形品である。図示のような特異な形状をなし、平面に突起と穿孔、下面に孔が施される。16は一端を欠くが左右対称形をなすものと考えられる。中央の突起をはさみ一對の玉抱き三叉文が施される。



第14図 土製品，顔面把手

(15: 1号住居覆土， 3: 2号住居覆土， 6・12: 捨て場下層， 2・14・16・18: 捨て場上層)

3 石器 (第15図～17図)

I期～III期土器群に伴い多量の石器類が検出された。製品の数量構成と形態的特徴、石核・剥片類の石材組成についてのべる。

● 石器組成 (第1表) 製品とみなした11器種239点はいずれも生産用具に該当するものである。本地域の中期集落で出土が予想される器種を網らする内容となっており、当地区中期前葉集落の石器様相を示す好資料といえる。これら一群の資料を最も特徴づけるのは、大量100点率にして42%を占める石鏃である。従来弥彦・角田山周辺では、巻町上ん原・御井戸、岩室村青竜寺、弥彦村夷塚・蒲田といった後・晩期を主とする遺跡において多量の出土が確認されていた。一方、中期段階における石鏃量は総じて少なく、豊原遺跡IIc層～I層(中期前葉～中葉)で16点(8%)、大沢遺跡B地区(中期全般)で14点(17%)、同B'地区(中期前葉主体)で5点(7%)の出土をみたのみである。こうした傾向は前期の主要遺跡、布目・新谷・豊原VI～IV層でも認める一般的な在り方で、本地区出土石鏃量の特異性を示すものである。磨石・敲石類や砥石の多出現象は、近年調査がなされた新谷・布目(前期前葉)や豊原III～I層(前期後葉～中期中葉)でも確認されている。縄文集落全般に後者の出土が少ない点が気がりではあるが、少なくとも当地の前・中期遺跡では通常の在り方と理解しておきたい。

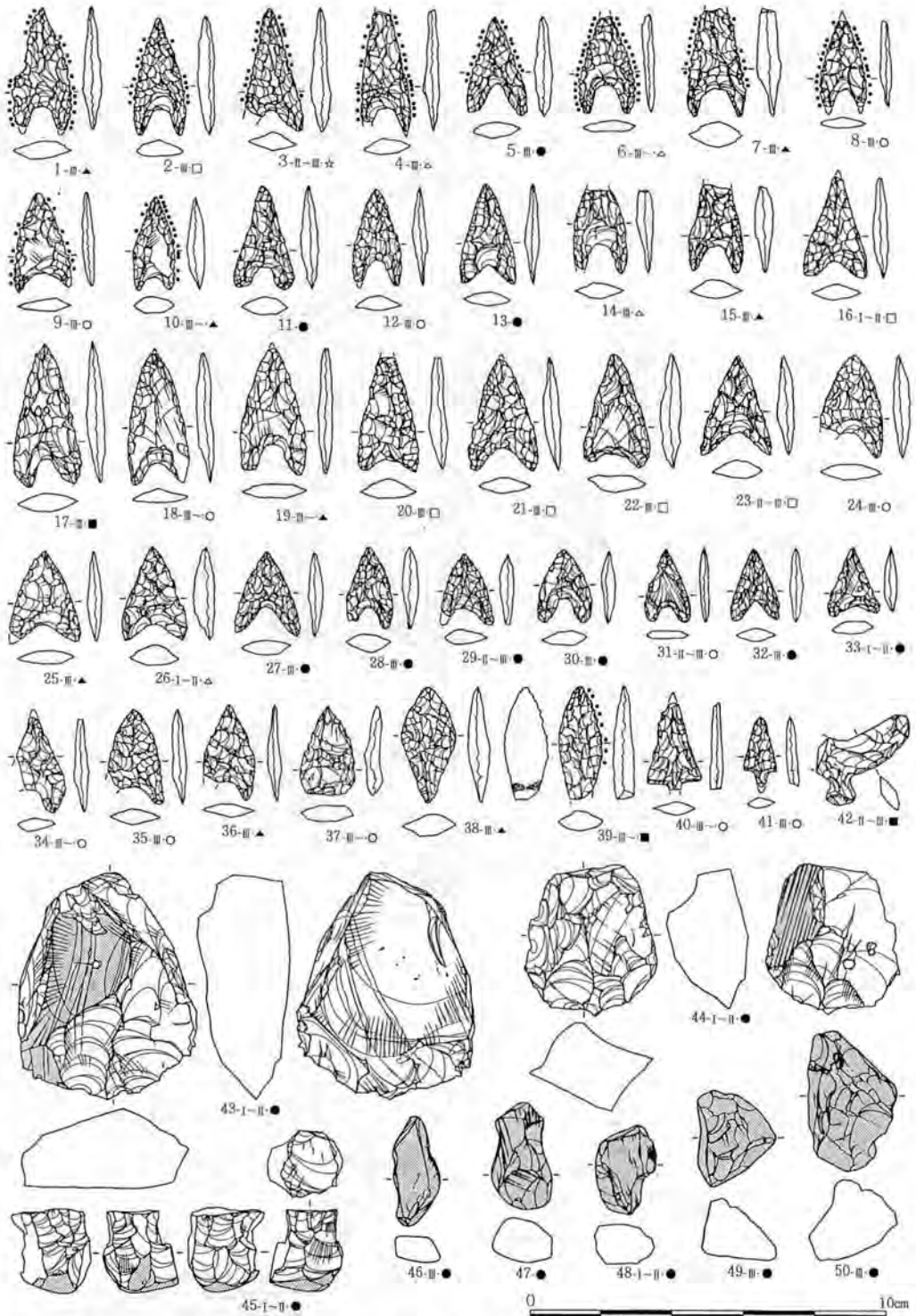
大別時期ごとの内訳を第1表に示す。土器の出土傾向と同様、検出資料の大半はIII期に所属する。時期別にみると、III期上層部で砥石の減少を認めるほかはおおむね安定した状態を保つ。石鏃出現率がいくぶん低いI～II期については、III期へ至る土器量と石鏃・剥片類出土量の増加率に有意な差異をみだしがたいので、資料数の乏しさに起因する偶然の欠落と考えるべきであろう。

器種 時期	石鏃	礫石錘	磨石・ 敲石類	石皿	打製石斧	磨製石斧	石匙	スクレイパー	石錐	ピエス・ エスキーユ	砥石	TOTAL
I～II	6	—	5	1	—	1	1	1	—	—	6	21
II～III	13	2	4	1	—	—	1	2	—	1	2	26
III	45	5	17	3	1	2	2	2	1	2	20	100
III上部	32	6	22	5	1	2	1	7	1	2	4	83
不明	4	—	3	—	—	—	1	—	—	—	1	9
TOTAL	100	13	51	10	2	5	6	12	2	5	33	239

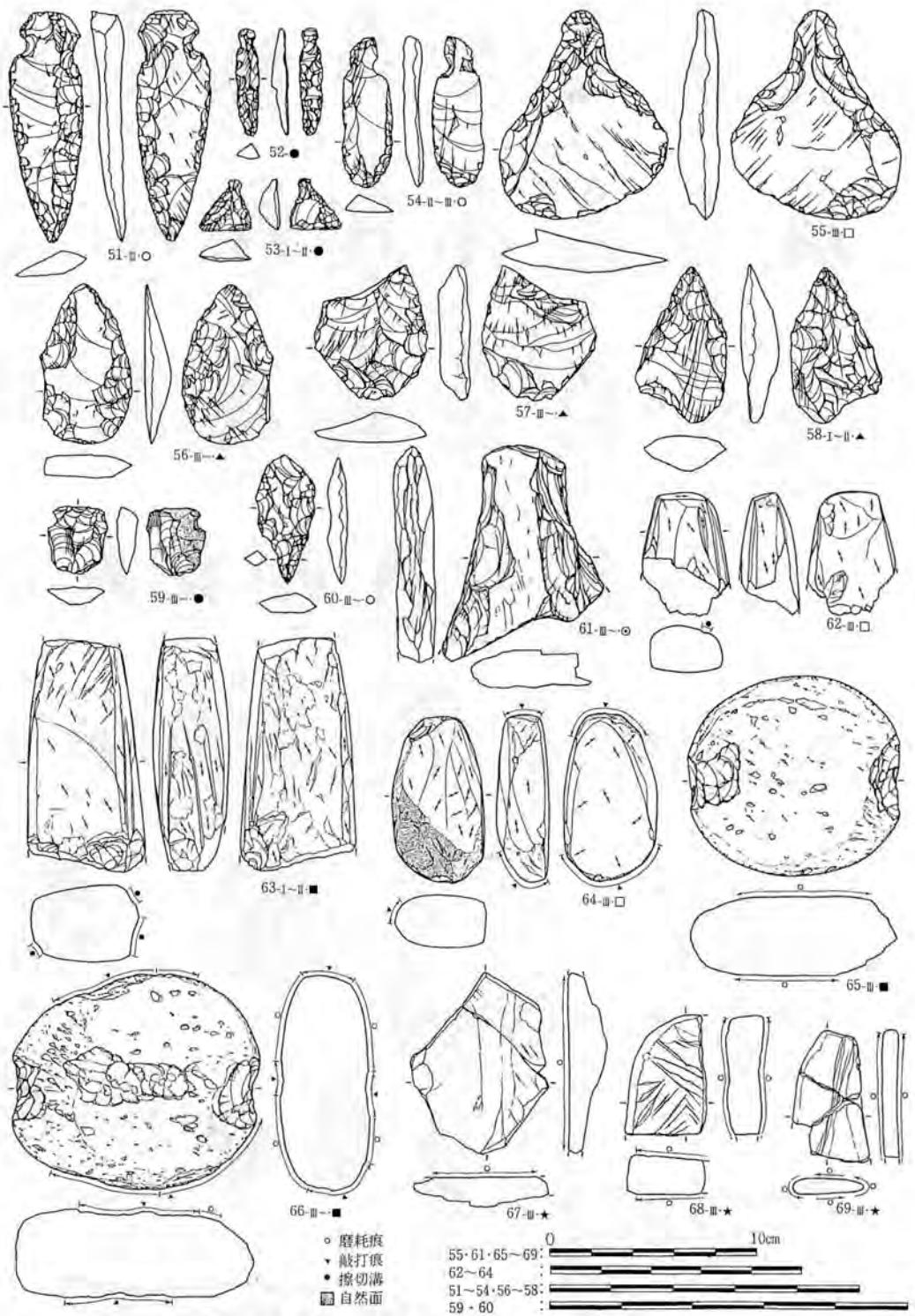
第1表 石製品時期別出土数一覧

● 個別器種の概要 第15図～17図に代表的な資料を掲げる。掲載資料は、石鏃(1～42)、石匙(51～55)、スクレイパー(56～58)、ピエス・エスキーユ(59)、石錐(60)、打製石斧(61)、磨製石斧(62・63)、磨製石斧未製品(64)、礫石錘+磨石・敲石類(65・66)、砥石(67～69)、磨石・敲石類(70～77)、石皿+砥石(78)である。

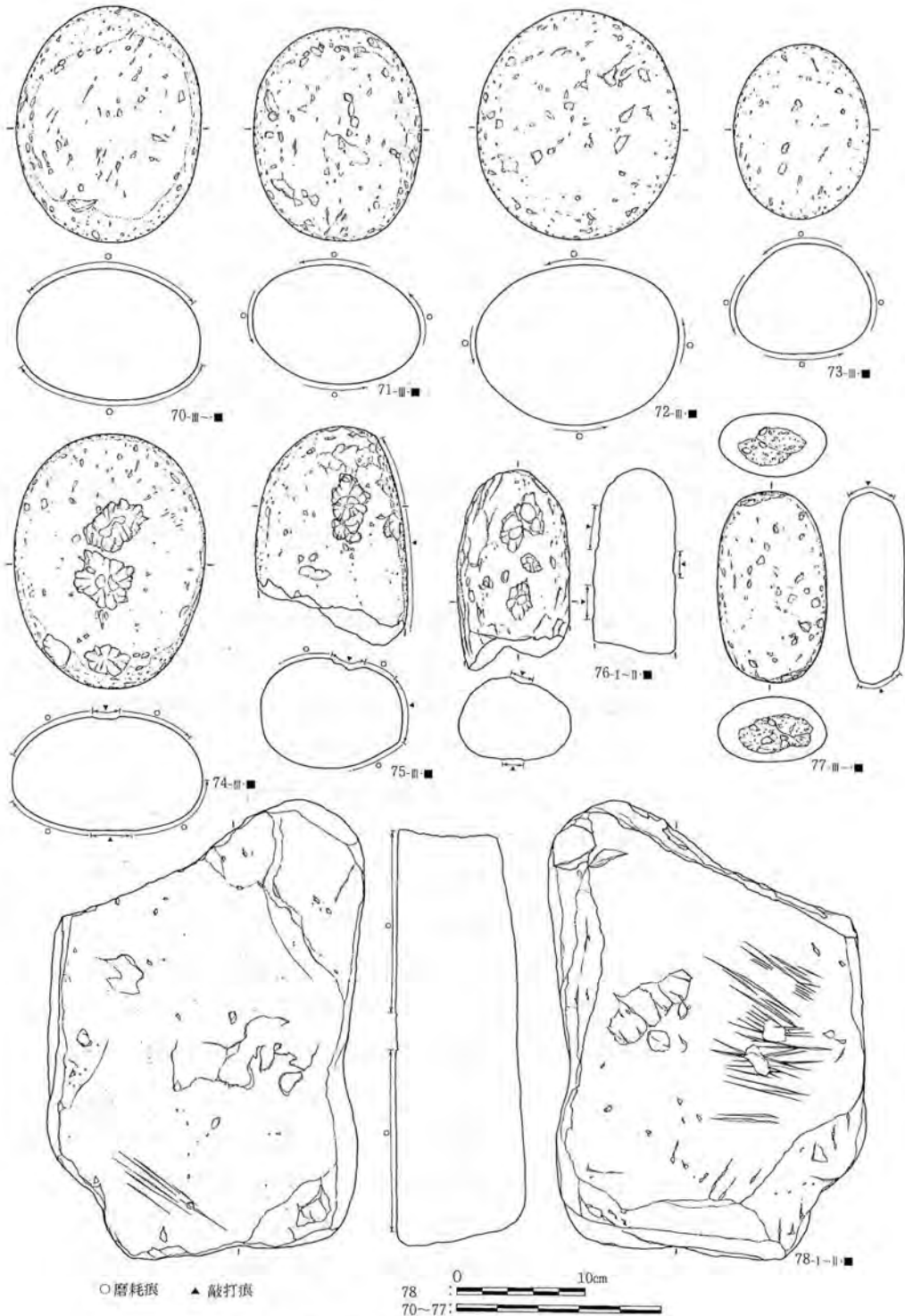
石鏃は、基部形態に基づけば大別5種のバリエーションを認める。内訳は分類可能な98点中92点までを凹基無茎鏃(1～36)が占め、他は円基無茎(37)、尖基(38・39)、平基有茎(40・



第15図 石器(1) 網点：自然面 ドット：鋸齒状縁 石質：●黒曜石 ▲頁岩 ■安山岩 ☆チャート
 砂目：アスファルト ローマ数字：推定時期 ○メノウ △鉄石英 □流紋岩



第16圖 石器(2) 石質：● 黑曜石 ▲ 頁岩 □ 流紋岩 ○ 石墨片岩
 ○メノー ■ 安山岩 ★ 砂岩



第17圖 石器(3) 石質：■安山岩

41)、雁股鏃(42)を1~2点ずつ認めるだけである。側縁形態で目だったところでは、両側縁もしくは一側縁を鋸齒状に加工する資料が凹基無茎鏃に32点、尖基鏃に1点確認された。後者(39)は基部にアスファルトの付着を認める唯一の資料でもあるが、Ⅲ層最上部出土のため所属時期の特定は困難である。新潟県内ではⅢ期遺跡を中心にこの種の側縁加工をもった無茎鏃の存在が知られている。しかし、30%強を示す鋸齒縁加工率の評価に関しては、比較資料の乏しさにより明確にしえないのが現状である。今後の資料増加に期待したい。

6点の出土をみた石匙は全て形態を異にする。このうち流紋岩を石材とする55は、いわゆる大形粗製石匙に該当するものである。

磨製石斧は擦切溝をとどめる2点を図示した。63はⅠ~Ⅱ期、62はⅢ期の所産である。64は敲打技法による半製品で、片面刃部を中心に自然面を残す。製作工程資料の出土は本例のみで、擦切石斧製作関連資料は検出されなかった。

砥石の大多数は粗粒砂岩を石材とする。大半が扁平な形状をなし、機能面における溝状使用痕は不顕著ないし皆無の個体が多い。これらは新谷・豊原で大量出土をみた資料と石材・形態ともに酷似するものである。

磨石・敲石類のうち、使用痕に基づく分類可能個体は39点を数える。うち過半の20点は平面に磨耗痕のみを認める資料(70~73)である。使用痕別では、平面磨耗率(87%)を除けば概して低率にとどまり、平面敲打(いわゆる凹石)率の26%、側面敲打率の21%が目につく程度である。78は唯一の完形石皿である。機能面は全点盤状をなす。

● **石材組成** 石製品とともに大量の石核・剥片類が検出された。弥彦・角田山塊における産出の有無により、遠隔地系と在地系に大別しておく。

遠隔地系石材は黒曜石のみである。外観上大形石材(43・44)と玉砂利状石材(45~50)に区分できるが、ここでは二者の存在を指摘するにとどめる。後述の3か所(29㎡)全体集計結果によれば、黒曜石は242点、率にして49.5%の数値を示す。弥彦・角田山周辺における黒曜石の利用は、前期終末から後期後葉に至るまでの間で確認されている。しかし、本地区に類した事例は過去大量の出土をみた重稲場遺跡群—重稲場・道上・上田の総称—(前期末葉)1例だけで、これを除けば上原(後期主体)の3%から豊原Ⅱa~Ⅰ層(中期前葉~中葉)の24%の範囲内にとどまっている。時期を中期に限定しても、豊原で11%(中期全体集計)、本遺跡B地区で9%、同B'地区で8%を記録するのみで、隣接地区や近隣集落との間にもみられる際だった利用格差が注目される場所である。また、本地区の成立まもないⅠ期の利用率(80%)が土器型式の上で一時期先行する重稲場遺跡群の数値(90%前後)に近い事実は、両者の関連性を示唆する興味深い現象と考えられる。

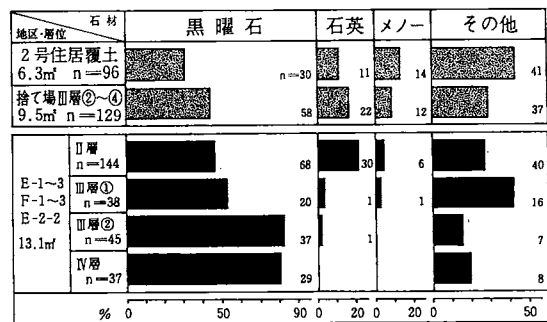
在地系石材は、石英(水晶)、メノー、チャート、鉄石英、流紋岩、頁岩、安山岩、泥岩な

ど多種・多様な内容からなる。このうちメノーとともに量的な主体を占める石英が剥片石器中わずか3点にとどまることは、きわめてアンバランスな現象として留意されるものである。

第18図に地区・層位別の石材組成を示す。発掘区北部の層位別資料は石材組成の時期的な変化、2号住居覆土と捨て場資料はⅢ期の様相を知りうるデータである。本地区における石材組成はⅡ期・Ⅲ期の間を境に明確な変化をみせる。端的に言えば、黒曜石が大半を占めるⅠ～Ⅱ期の段階から在地系石材の割合が高まるⅢ期への移行である。この過程においてみられる黒曜石出現率の低下現象は、一見在地系石材との定量的な補完関係を示すかにみえる。しかし、発掘区北部のⅡ層（Ⅲ期遺物包含層）において黒曜石の出土量がむしろ倍増していることから、その実態は黒曜石の供給量を上回る在地系石材の活発利用に求められるのである。単位面積あたりの黒曜石出土量（発掘区北部面積換算）

が2号住居（62点）と捨て場（79点）で似た数値を示すこともこの裏づけとなる。

Ⅲ期に至り石鏃出土量が急増することもまたこれと符合する現象である。石鏃生産量の急激な増大に伴う用材確保の必要性が在地系石材の積極利用を促した大きな要因と考えられる。



第18図 地区・層位別石材出現率

4 動・植物遺存体

多量の炭化材・炭化種子と微細な焼骨1片が検出された。分析が終了した大形炭化種子の同定結果を報告する。

分析資料はC-5-1・3, C-6-1区に設けた南北セクションベルト（50cm幅）のⅢd層（捨て場下層）より採取された大形種子片86gである。これらはⅢd層（最大厚20cm）の全発掘残土320gを搬入した後、5ミリメッシュふるいによる水洗選別を経て抽出したものである。発掘時の観察所見によれば、多量のⅢ期土器群や炭化材・焼土粒子などと混在状態にあった。

分析資料のほとんどが破片化しているため、同定個体は少数にとどまった。内訳はオニグルミの堅果破片多数、クリの種子破片(?)6点、コナラ属の種子破片(?)1点、ヒシの刺針3点である。オニグルミは温帯の山地～丘陵の沢沿い、クリは温帯下部～暖帯上部に分布し、ヒシは池沼等の淡水域に生育する。

以上の同定遺体は構成種が単純で、いずれも可食堅果類と断定もしくは推定できるところから、ナッツ採集における選択利用の一端を示す資料とも考えられる。また、3点の出土をみたヒシは、本遺跡B'地区直下の沖積面下で縄文前期相当層準における淡水化が確認されているので、集落下の旧沼地で採集されたと考えるのが妥当であろう。

V 花粉分析

● **試料** 分析試料はE-1-2区西壁(1号住居址)とD-5-1区東壁(捨て場)より採取した計14サンプルである。このうちE-1-2区IV層下部の2試料は住居址覆土に該当する。D-5-1区のⅢd層では準完形土器の集中廃棄がなされ、以後Ⅲc層上部に至るまでの間に多量の土器が包含されていた。

● **処理方法** 各層ごとに採取した試料は100~200gを分析に供し、①10%水酸化カリウム処理②塩化亜鉛溶液による有機物の分離、③沸化水素・アセトリシス処理、の順で処理を行った。分離された花粉はグリセリンゼリーを用いスライド・カバーガラスに封入した。木本・草本の花粉および胞子は100個体をカウントするのが一坏の量で、各プレパラート100個体を検鏡同定した。

● **花粉構成の時代的变化** 花粉ダイアグラムを第19図に示す。2か所の壁から採取した分析花粉は共通性が多々あり、下位よりA・B・C・D帯に区分する。括弧内は堆積時期である。

A帯(更新世) 木本・草木ともに花粉量が極端に少なく、ほとんどがゼンマイ類の孢子植物で占められる。

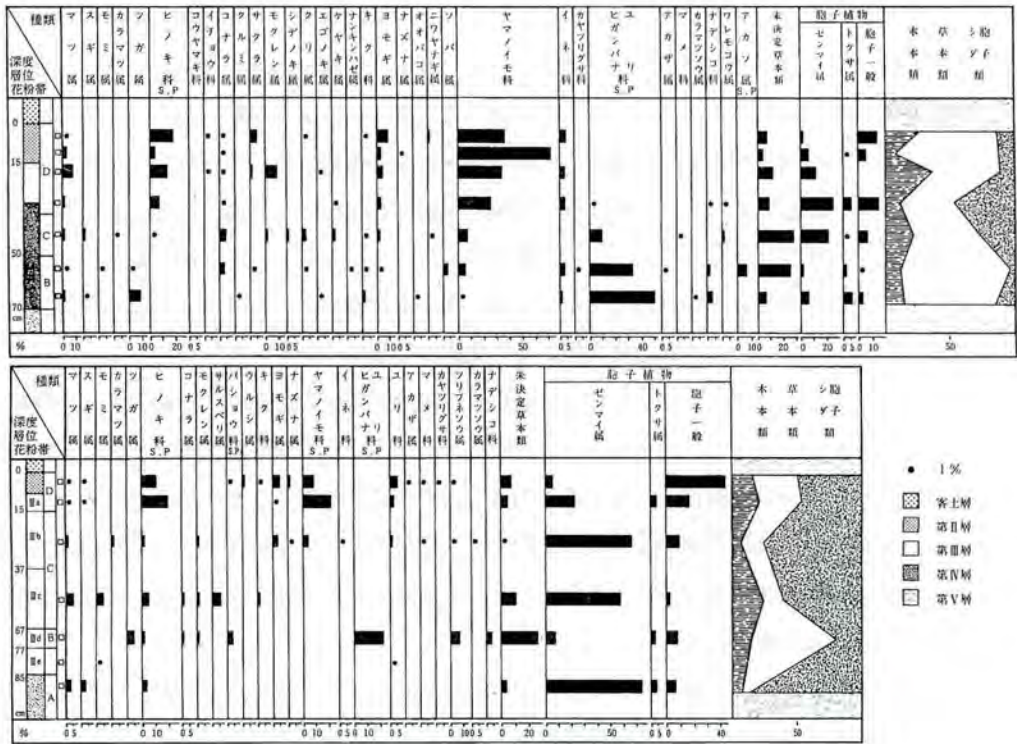
B帯(縄文前期末~中期前葉古段階) ユリ科またはヒガンバナ科と思われる花粉(図版4-A)の多産を特徴とする。木本花粉はA帯同様少量である。低率ながらE-1-2区(1号住居覆土)でソバ属s.p花粉(図版4-D)を認める。なおD-5-1区Ⅲd層(中期前葉新段階堆積層)も本帯の様相を示す。

C帯(縄文中期前葉中段階~新段階) B帯の指標となったユリ・ヒガンバナ科は急激に減少し、D-5-1区を中心に再びゼンマイ類を主とした孢子植物が主体を占めるに至る。木本類は増加傾向にあり、次のD帯への移行過程をうかがわせる。

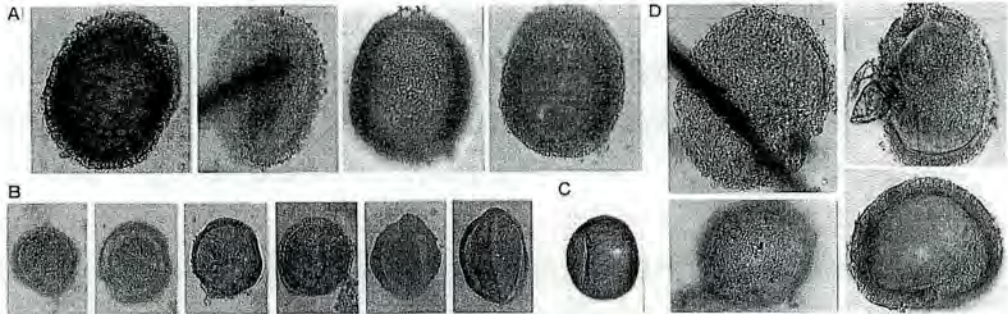
D帯(縄文中期前葉新段階~) E-1-2区のⅡ層(中期前葉新段階)を中心にヤマノイモ科(図版4-B)の多産がみられ、似た傾向がD-5-1区Ⅲa層(中期前葉新段階以降)にも認められる。木本類はヒノキs.pを中心にマツ、サクラ、モクレンが増加し、山腹傾斜地の特色を示す。

● **遺跡と古植生** 今回の試料採取地は角田山の山腹斜面、標高にして48mを測る尾根上に位置し、丘陵山林植生の指標となる木本類の検出が予想された。しかし、2か所14サンプルからえられた分析結果は木本類が総じて少なく、D帯でかろうじて山腹斜面的な植生の一端が示されたにすぎない。これにかわって主体をなすのは、根菜類ともいえる3種の草本・孢子植物である。それらはユリ・ヒガンバナ(B帯)、ゼンマイ(C帯)、ヤマノイモ(D帯)の順に明瞭な遷移をとげる。

ところで、試料を採取した2地点は、ともに集落の中央部ないしは隣接部にあたる区域である。したがって、各帯における草本・孢子植物の卓越は、人為的な裸地化によって生じた2次植生と考えるのが妥当であろう。遺跡形成期にあたるB帯～D帯は、土器の廃棄量にみられる変遷に照らせば次のような見方も可能となる。集落の成立まもないI期がB帯に、遺物量の加速度的な増加をみせるII期～III期がC帯に、遺物量がピークに達しやがて急激な減少へむかうIII期～III期以降がD帯に、という推移である。B帯からD帯へ至る目まぐるしい植生変化は、大きな変動をみせる空間利用の在り方とも共通しており、そこに関与した何らかの人為的な要因を考慮させる。



第19図 E-1-2区(上)とD-5-1区(下)の花粉ダイアグラム



図版4 花粉顕微鏡写真 Aユリ・ヒガンバナ科S.P, Bヤマノイモ科, Cタチドコロ(ヤマノイモ科—現生), Dソバ属S.P
200倍×1.3 200倍×1.3 200倍×0.7 200倍×1.3

VI 結 語

大沢遺跡A地区の一角を対象とした今回の調査は、総面積100㎡たらずの小規模な発掘であった。しかし、最大1mにおよぶ遺物包含層の堆積は当初の予想をはるかに上回り、抽出しえた情報も多角的かつ良質な内容であった。既述の項目の中から重要と思われる点をいくつか選び、提起される問題や今後の課題を明確にしておきたい。

今回幸いにして前期最終末～中期初頭集落の一部が検出されたことは、大沢遺跡の成立背景を考える上においていくつかの手がかりを提供してくれた。第1点は集落立地と石器組成の相関性についてである。従来、角田山周辺では前・中期遺跡の多くが現沖積地にほど近い低域部に立地し多量の礫石錘を伴うケースがみられる一方で、丘陵・山地上を中心的な居住域とする後期遺跡でそれらが皆無に等しい現象が知られていた。このような動きの中で、本遺跡はいち早く山地上へ進出した先駆的な集落と位置づけられる。本地区からえられたⅠ～Ⅱ期の石器群は、数量的な制約はあるものの基本的には後期集落の石器組成と共通した様相を示しており、遺跡立地との相関性を裏づける一つの補強資料となった。しかし、古環境との関わりについてはまだ具体的な検討を行う段階に至っておらず、現沖積面下における水域環境の復原が重要な課題となる。第2点は、大沢遺跡A地区構成集団の系譜についてである。Ⅳ-3で既述のとおり、本地区における剥片石器の石材組成は角田山麓内で重稲場遺跡群（前期末葉～北陸編年真脇式期主体）に唯一類似性を認める。今回検出された在地系土器Ⅰa期や円筒下層d式系土器は、集落の出現時期が前期最終末（北陸編年朝日下層式期）まで溯ることを明らかにしたが、これによって重稲場遺跡群の廃絶と本地区の成立は土器型式の上で連続性をもって継起することになった。両遺跡の関係を明確にするためにも、本地区成立期の確実な上限と土器様相を把握しうる資料の充実が望まれる。

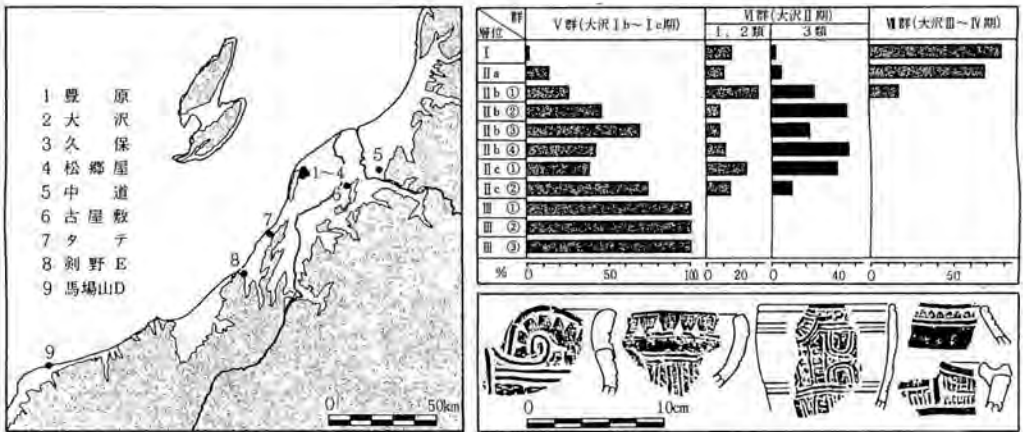
土器群の概要についてはⅣ-1で既述のとおりである。この中で、Ⅰ～Ⅲ期の土器様相が角田山麓に所在する他の集落と各時期異なりをみせ、木目状撚糸文の使用原体の変遷にも同様の現象がみられることを指摘した。比較対象とした松郷屋は本遺跡の3km南、豊原は4.5km南に位置し、ともに土器型式の上で連続性を認める遺跡である。上記のような現象に対する一つの説明は、遺跡間に微妙な時間差が存在する可能性、つまり移動を想定する見方である。この場合における移動範囲は、遺跡立地や石器組成などにみられる相違に基づくかぎり角田山麓内で完結するとみるべきではなく、さらに一土器型式内における頻繁な移動を想定するならばきわめて多岐におよぶケースを考える必要がある。しかし、豊原遺跡で大量に出土したⅥ群3類土器が周辺地域一帯で皆無に等しい現象（第20図）は重大な問題を提起する。確かに上記の解釈は集落移動と同時に型式変化が生じた場合において成立可能ではある。だがそれ自体稀有なケー

スと考えるべきで、むしろ同時にみいだせる土器製作集団の個性にも目を向ける必要がある。このような観点から土器の異なりを素直に読みとれば、定住生活を営む中で生まれた集落間の変差とみることもまた可能となる。少なくとも解釈の合理性からいえば、より自然な見方であり、あえて複雑な移動パターンを想定する必然性は認めがたいのである。近年説かれるところの「集団移動論」にとっていささか不利な一事例として提示しておきたい。

IV-3で本地区石器群にみられる特異性を指摘した。その一つは、石核・剥片類の中に占める黒曜石の割合が近隣集落や本遺跡隣接地区にくらべ際だった高さを示す事実である。先述のように、角田山周辺における黒曜石高利用遺跡は本地区と重稲場遺跡群の2か所に限定される。しかも両者は土器型式にみられる連続的な推移から同一集団に帰属する可能性も示された。このような特殊な状況をふまえれば、黒曜石の入手に携わる特定集団が地域の中に存在し、特定集落を中心とした石材流通関係が成立していた蓋然性は高く、黒曜石の獲得と流通に関与した本地区構成集団の中核的な役割が推定できるのである。佐渡郡真野町吉岡惣社裏遺跡や小木町長者ヶ平遺跡（前期末葉～中期後葉）で利用が確認された信州産黒曜石はまた、中継地にふさわしい地理条件をもった角田山麓遺跡群がその供給に何らかの形で関与した可能性も示唆している。本地区や重稲場遺跡群の石材産地同定を急務としたい。

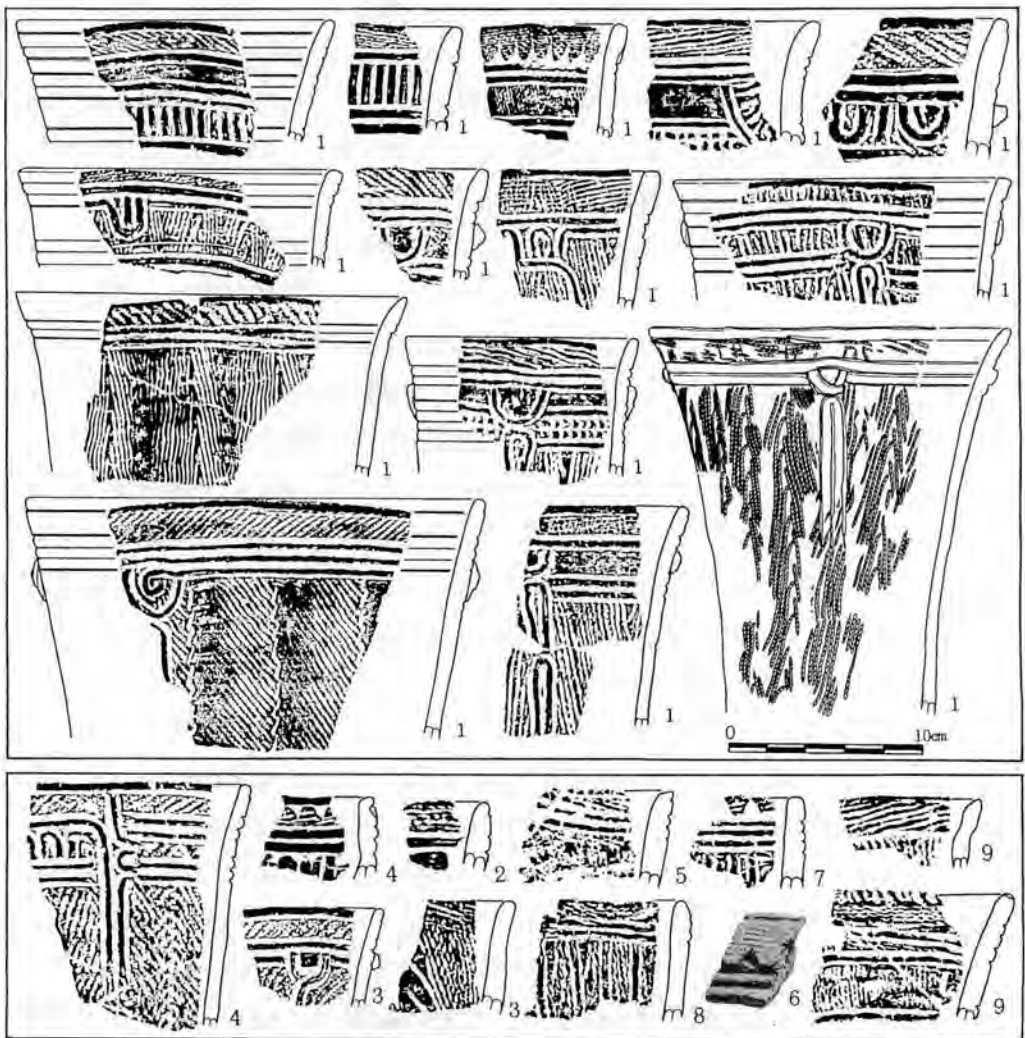
石鏃多出現象の解釈も本地区構成集団の性格を考える上で重要な問題である。他集落にくらべ異常なまでの高さを示す出現率は、本地区における石鏃保有量の多さを物語る大きな指標となる。しかし、石鏃以外の生産用具組成に遺跡間の有意な差はみだしがたく、経済基盤の質的異なりをここに想定することは適切でない。各遺跡に存在する一定量の石核・剥片類は、他集落への供給を意図した石鏃の大量生産を否定的に導く要素である。また、シカの棲息分布から推測される集落間の非独占的領域占有関係や狩猟活動自体のもつ食料獲得効率の低さからすれば、本地区構成集団だけが狩猟活動に高い依存を置いたとみるのは短絡的な解釈といえよう。この点に関し、黒曜石の獲得と流通にかかわる上記のような推定は、角田山麓の複数集落から構成される集団狩猟の存在や、その編成にあたり本地区集団が担った主導的な役割を十分考慮させるものである。角田山麓でこれまで入手しえた情報からこの問題を具体的に論じることは困難であるが、千葉県貝ノ花貝塚におけるシカ・イノシシ遺体残存部位の分析は、動物遺体の保存が良好な豊原遺跡が重要な鍵をにぎることを予想させる意味で重視される。豊原を含む複数遺跡の面的調査をつうじ問題の深化がはかられるものと期待される。

今回2か所で実施した花粉分析できわめて特徴的な結果が提示された。特定の草本植物や孢子植物が高い出現率をもって目まぐるしく遷移する現象であり、各帯の卓越種がユリ・ヒガンバナ科（B帯）、ゼンマイ属（C帯）、ヤマノイモ科（D帯）といった根茎類に該当することも注目される。未特定種を含むため、すべてが食料資源として利用しえたかどうかは不明である。



類似資料出土遺跡の分布

大別土器群の層別出現率とVI群2類土器



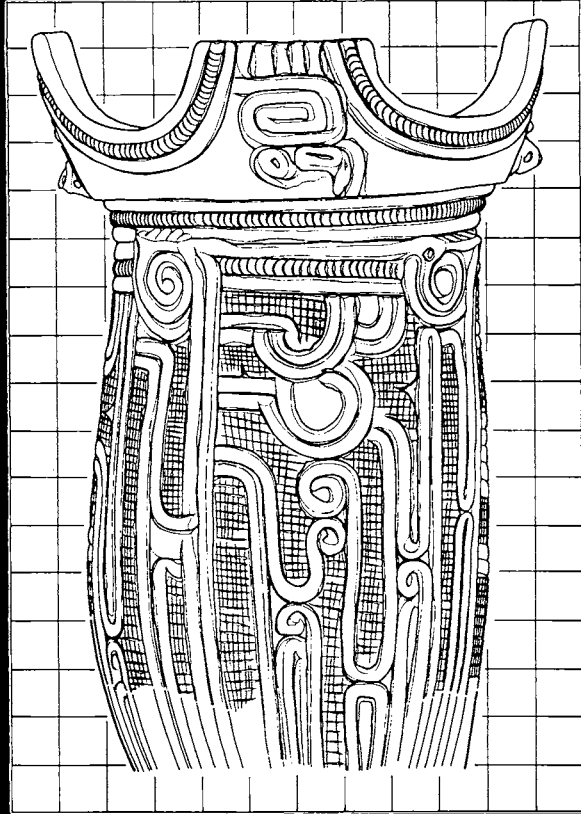
第20図 豊原VI群3類土器と類似資料(遺跡・遺物番号同一表記, 2~9は縮尺不同)

しかし、居住・廃棄ゾーン内に位置する試料採取地の特性からして人為的な働きかけが頻繁になされる条件下で生育していたことは間違いなく、何らかの利用を想定するのが自然な見方である。同時期の豊原遺跡Ⅲ層ではクリ属花粉の多産も確認されている。総じてこれらは「半栽培段階」の概念に適合した在り方ともみられ、二次植生の利用を示唆する好事例と考えることもできる。低率ながらB帯で出現するソバ属花粉の存在も留意される。しかし、具体的な評価については種の特定や周辺試料の分析をつうじ慎重に検討してゆく必要がある。

花粉分析で提起された問題に関連し、炭化種子の分析でもいくつかの知見がえられた。同定された遺体は食料残渣とみられる4種の堅果である。山腹や沢沿いに分布するオニグルミ・クリ・コナラ属の3種は東日本縄文集落の出土種子としては最もポピュラーな組み合わせで、本遺跡においても重要な食料資源として大量に採集されていたものと推定される。反面、花粉出現率の上でこれら3種がきわめて低率にとどまる事実は、主たる採集地が集落から離れた山林に求められることを教えてくれる。ヒシの出土は当時の活動領域が眼下の低湿地にも及んだことを実証する貴重なデータとなった。また、集落周辺が裸地化されそこに生育する有用植物が利用されていたとすれば、植物質食料の獲得に関わる3つのゾーンが設定できる。今後は砂丘地遺跡群等の散布地(第1図)を一体として捉えた活動領域の把握が重要課題となろう。

参考文献

- 阿部芳郎 1987 「縄文中期における石鏃の集中保有化と集団狩猟編成について—高根木戸と高根木戸北集落の関係—」
『博物館紀要』第14号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 小野 昭 1986 「石器の生産」
『岩波講座日本考古学3 生産と流通』岩波書店
- 小野 昭 1988 「巻町豊原遺跡の調査」
『巻町史研究』Ⅳ 巻町
- 小池裕子 1987 「宮崎博論文「土地と縄文人」に関する先史生態学からの一コメント」
『貝塚』39 物質文化研究会
- 西田正規 1989 『縄文の生態史観』 東京大学出版会
- 林 謙作 1980 「貝ノ花貝塚のシカ・イノシシ遺体」
『北方文化研究』第13号 北海道大学附属北方文化研究施設
- 福井勝義 1983 「焼畑農耕の普遍性と進化—民俗生態学的視点から」
『山民と海人』 日本民俗文化大系5 小学館
- 山本暉久 1987 「縄文時代社会と移動—「集団移動」論をめぐる研究の現状とその問題点について」
『神奈川考古』第23号 神奈川考古同人会
- 渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』 雄山閣
- 藁科哲男 1988 「佐渡島内遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地同定」
『佐渡考古歴史(会報)』第12号 佐渡考古歴史学会
- 東村武信



1990年3月発行

大 沢 遺 跡

—縄文時代中期前葉を主とする集落跡の調査概要—

発 行 新 潟 県 西 蒲 原 郡 卷 町 会
新 卷 町 教 育 委 員 会
印 刷 新 潟 県 西 蒲 原 郡 卷 町 社
北 洋 印 刷 株 式 会 社